

550

57



始



550

57



川上正  
藏書

正  
15. 6. 9.  
購求



550-57

はしがき

大正十二年九月一日の大地震と大火事に我著書一切の紙型は全滅に歸して仕舞ツて、おまげに都下の印刷工場また殆ど灰燼となり殆ど能力を失ふた中から復興したのが此浪六全集で、こゝに漸く再び世に出るといふ事は、著者として死んだ子の蘇生した親心から、更に多少の筆を加へて再生の愛兒に着物を着かへさせた點もある。

大正十三年の秋

川上三吉

川上三吉

胡馬は北風に嘶き越鳥は南枝に巢を作る、古い文句なれど今なほ人情は新に斯の如  
き世の常として、踵に砂を蹴つて飛び出しても、さて何とやら戀しきは生れ故郷の空、  
どれほど骨身に染み渡つても、さて懐しいは過ぎし艱難辛苦の境涯、これを第一の

故郷とぞいふ、

およそ男は二箇の故郷を持つた後、始めて世に立つを得べしとの諺、むさい比喩な  
がら親譲りの白い米を喰つて先祖代々の厠に黄なる糞のみ垂れる奴が人生そもく、  
何の面白味を解すべき、只これ醉生夢死の徒輩、屍に息が通うて蠢くばかりの業、  
天下横行の肥馬軽車も往昔の雨露霜雪に打たれずんば尊からず、金殿玉樓の暖衣飽  
食も過ぎし飢渴を顧みてこそ其快はあれ、今の憂き身も何ぞいの臆ての寝物語りと

は賤しき賣女の口説にも聞く、ましてや堂々たる男児の生涯が夕陽の影法師と一般、ひよろくと長く脊ばかり伸びて濟むべきや、松は曲つて趣を生じ世は苦しんで快を知る、おのれが半生を見返つて多少の波瀾と興味なきものは白癡が晝寝の放屁一發に如かず、蝸牛も家を荷うて好むところに歩み土龍も地を掘つて意の向ふところに移り行くを思へば、人として生れながらの富貴壽命と在ながらの門戸安逸とは人生こゝに半文の價値なし、

されば例に依つて例の五人男、いづれも前後おのゝ第一の故郷を飛び出して後、また更に第二の故郷より飛び出したる浮世の利害得失と窮達消長、その屈伸成敗は兎も角も過ぎし苦學十年の遺跡を思へば、終夜の藪蚊に攻められて吊板飛び乗りの窮策を演ぜし夏も、筑波おろしの北風の布子一點寒曝しの冬も、一つ鍋の底を叩いて飢を凌ぎし今昔の感うたゝこの興味を知るものは五人の外になく、現在こゝに境

遇の懸隔と運命の厚薄ありながら、猶その友誼交情は依然として昔のまゝの骨肉に等しき快事また五人の外になく、半夜の夢さめても忘れぬは空腹の膝小僧を抱き寢せし隅田川の片邊、よしや志を得て名を成すの曉も戀しきは落葉寂寞の汐入村に月漏りし軒の片廂、あゝ五人のうち誰か尤も此の感の深きぞ此興味の多きぞ、當時を顧みて胸に浮ぶ感興の深淺多少は將來この五人の前途を卜するに足るべし、されば現在の五人、いちゝ今こゝに類を分ちに其境遇變遷いかにと見れば、まづ年少の後進は吉田雄藏、これ只おのれの分を守つて謹直の資性に日夜孜々たる修業の最中、いまだ校舎の門を出でねば浮世の風にも當らず、しかも後れて遅く汐入村に馳せ加はり先んじて幸ひ秩序ある學窓に入りしかば、その成敗は他日の事、暫く池中の物として論ずるに足らざれど、儲こゝに例の黒田健次は例の黒田健次、養ても焼いても同じ昔のまゝの黒田健次、そもく此奴が黨中隨一の難物、人にも持て餘

され自己また我身を持って餘しながら、いはゆる蛙面馬耳郎と呼ばれたる厄介物、うき世の萬事一切を蛙の面に向ふ水と受け流し毀譽褒貶の野馬の耳に空吹く風と聞き流して、のんこの洒ア／＼たるどころ更に悔い改めず、づう／＼しき横着心いよいよ甲羅を経て今は土細工の鐘に等しく、打つても叩いても音なきかと思へば、また時も處も構はず無用の音を發して呻り出す駄辯滔々、無欲に似たる大慾を幾度か仕損じて元の空阿彌となつたる果は、月下氷人が狼狽へて添はしたる不相應の貞女を有難いとも思はず、その戀女房に門三味線まで弾かして死に別れた後に残つた自己は九尺二間の裏長屋に病み煩うて、この時ばかりは流石の奴も聊か無情を感じて世を張り拔きの山氣は少々衰へたれど、やはり寢て喰ふ鼻唄まじりの怠性は止まず、ごろ／＼と食客的に顛け廻つて今年三十一、元來うまれついで馬鹿でもなく狂氣でもないだけに猶更ら以て度し難く、千枚張の面を振り上げて我流の理窟を捏

ね出し如何なる敵にも席にも怯めず臆せず、饒舌る事は人一倍に立勝つたるだけ愈愈以て始末に終へぬ男、さて此後は何となるやら、この黒田に引き換へて出處進退いづれも萬事に物の哀れを含めるは上田力の一身、たゞ見る五尺八寸二十貫目の大兵肥満、のツそりとして悠々たる風采相貌、用ひざれど膂力は能く普通の五人以上に敵し、奔らざれど鐵脚また日に行くこと二十餘里、聳ゆる兩肩は野山の如く張れる腰骨は石臼の如く、嚴冬の極寒にも東天の空に氷を砕いて水を浴び三伏の炎天にも大道を闊歩して流る、汗を厭はず日を避けし事なく、鹽を舐めて飯を喰へば一日の平均一升五合を餘さず、與ふれば琉球の泡盛を好んで下物なき大盃に甘露々々の舌鼓、正にこれ宛然たる武者振の骨法を備へて古昔の勇士に似たれど、誰か憐れむ心は處女の抱ける球玉の如く、玲瓏たる露を聯ねし天真爛漫の性、をり／＼自然の滑稽を帯びて凡俗の意表に出づれど、當世に反いて時流に合はざる清淨無垢の潔白



は却ッて其身の衣食に事を缺きつゝ、過ぎし苦學十年は夢か幻か、徒らに穢れたる俗界を卑しむの種となりしのみ、しかも天の無情なる、そもく何の意か斯好漢をして三界の首枷ともいふべき妻子あらしめんとは、只その妻の貞淑その良人を知つて連れ添へばこそ僅に朝夕の浮世は漕いで渡れど、また妻に依つて飢渴を凌ぐ彼が心意を思へば轉た人生慘澹の極、ましてや首をあけて名利競争の世上を望み首を伏して膝に睡れる最愛の我子を見るの情に至つては、たゞ一滴の涙あるのみ、年を數ふれば數年の今昔その間は僅一里に足らぬ同じ流れの隅田川に添へども、汐入村の昔は口角に泡を飛ばして天下の時事を論じ意氣軒昂の腕を叩いて俗物の居家處世を嘲りし男、あはれ今は本所地方の河岸端に二間まぐちの借屋住居、宿昔青雲の志も煙となつたる名残か、煙草小賣の看板を掲げて妻が情の袖の影に身を忍ばせつゝ、或は三錢五錢の店頭に太き頸骨を動かし、或は習はぬ子守唄を謠うて横町の酒屋小

僧に笑はれ、たまくの晩酌には六尺近き大兵を縮めて妻子の身や削りし雫かと恐るゝ體、ために鬼神も泣くべし、されど上田の上田たる所以は斯くても猶その性を枉けず自己の愚は愚として飽くまで守るの清貧潔白、しかも他に求めず他を羨まず、元來の珠玉は依然として只その珠玉の時に合ふと合はざるとの得失、用と不用との成敗を思へば當世また得易からざるの人物、そもく今の世に幾何かある、吉田は以上の如く黒田は例の如く上田は斯の如き三人の後に控へたる倉橋幸藏、これは固より汐入村以來の持重謹慎と周到緻密をもて許されし男、出處進退に一定の節度あつて屈伸消長に一條の主義を保ち、しかも奔らずして歩み急かすして進む秩序的の頭腦は、苦學難行の巢を出でし曉、忽ち新聞記者となつて菩薩心夜叉手の名は一時の文壇を聳動せしが、深く思つて獨り我意に満たず、一朝その身を轉じて前途多望の官吏と稱せられしが、みづから顧みて心に安んぜず、その間の用を節して三年籠

居の資を貯へ、わざと世に断ち門を閉ぢ車馬も通はぬ根岸の奥の草叢に書を讀みしが、おもはぬ戀愛の露に落葉寂寞の學窓を驚かされて、いはゞ眉目清秀の片影もなき武骨の一寒生こゝに當時交際場裡の華といはれたる廟堂大臣の愛嬢を妻としながら、一夜の契情も許さず三年の他日を約して萬里の波濤を一足飛びに飛び出したる勢ひ、實に最始は處女の如く終結は脱兎の如き無言の硬漢また無言の友情あつて、以上の三人に一萬金の置土産を残したる活動は實に黨中の逸物、されば日夜孜孜として將に業を卒へ校舎の門を出でんとする吉田雄藏も、多年の失敗また失敗を重ねて病餘の近來は只ぼんやりと食客的に顛け廻りし黒田健次も、あはれ朝夕の浮世に追はれて人知れぬ妻子の情に泣きし上田力も、この一萬金を分ち得て如何に其身を處すべきか、おのゝ更に一生涯を開いて新に意の向ふところを行ふべき首途の前後巧拙、さては他日の利害得失、そもく誰か尤も倉橋の芳心に叶ふべき倉橋の友

情に酬ゆべき、事は三人の窮を救ひ乏を扶けて缺を補ひし誼なれど、實は無言の社會問題を掲げて三人のために残せし一場の試金石、やがて歸朝の曉その埠頭に其答案を得んとするが如し、  
こゝにまた一人、汐入村の昔より五人のうちの旗頭として隨一の先輩に推されたるは川上三吉、曾ては苦學十年さらに面白からず當世馳驅の結果また荒れたる田地一段を耕すの效も無しと、俄に學を廢し志を棄て都門の風塵を脱却して自己が生れ故郷なる紀州熊野の山奥に立歸りつゝ、あたらず有爲の生涯を抛ち猪猿を相手の獵師に身を終らんとせしが、例の上田が満身の友情と雙眼の熱涙に引き出されて再び世に出でし後たえて何のなすところもなき悠々寛々、徒らに美人の戀壻に迎へられて空しく舅の足跡に甘んぜんとするが如きも、誰か知る其間は獅子の睡るに等しきを、今や此眠獅に似たる深沈の大膽兒、將に全身の毛髪を振うて夢を破らんとす、吼の

る聲は果して奈何、

されば彼の倉橋幸藏がために一朝の機を逸せず忽ち万里波濤の大飛躍を勸めて世界の檜舞臺に押し出せしも、實は此川上が竊に設けし神算鬼謀、かの吉田雄藏をして一意専心の學資を給するも此川上が其身を節して與ふるがため、かの上田力をして浮世に屈しながらも清貧に處し潔白を保ちて最後の決心に一片鞏固の信念あらしむるも實は此川上が無言の聲援と無形の後楯あるがため、かの無遠慮無頓着にして縦横前後に野面のツペりと傍若無人なる黒田健次も猶かつ憚ッて其狼藉を逞しうし得ざるは實に此川上あるがため、いはゞ同志一味の重鎮となつて陰に陽に久しく牙旗を擁しつゝ後陣に控へし斯男、いよく戟を横たへて社會の戰場に出でんとす、破窓の苦學いたづらに夢一場、都門の半生むなしく露一滴、嗚呼と歎じ飄然と去つて故山に歸りしより六年目、聯珠の如き友情の涙に引き出され再び都に來つて思は

ぬ家の戀壻となりしより五年目、歳こゝに三十三、

其 一

堂々たる男兒、妻は娶るべし壻には迎へらるべからず、小米五合を持たば他家の養子に行くなどの諺あれど、これはまた靱糠一合も持たぬ赤裸一貫を其まゝ運び入れて、何の成す事もなく五年以來その家に衣食しながら、浮世の常の人情さらに氣の毒とも思はず、花の如き生家の一人娘に朝夕を珠玉の如く册かれながら、我は我たる態度依然として川上の性を枉げず、しかも義理親といふ舅の手前に心も置かず意も介せずして悠悠洒々たるところ、却つて梢を傳ふ春風に等しく滑かに暖き一家の睦じさは、わざと行つて能はず求めて得られぬ圓轉滑脱、技倆の外の男振といふべし、されど一家の圓満、男兒また別に門外社會の任あつて日夜の風雨は頻りに我を迎ふる

のみか、人をして世に立つべき三十の上も既に三年を重ねし曉、啼かず飛ばすの古語はあれど、長く啼かずんば聲いつしか枯れ長く飛ばすんば翼も縮んで伸びざるの恐れあり、いざ然らば久しく籠中の止木に憩うて無用の摺餌に養はれたる一身、いよく蒼空を颯々て川上三吉こゝに人知れぬ羽翼を整へぬ、

まづその羽ばたきとしては例の倉橋幸藏が得たる一朝の機運を逸せず、そつと策をめぐらし影に添うて一躍海外の志望を遂げしめし後、しかも萬金の置土産まで取つて残る三人の友に頷ち與へ、おのゝ一時に一生面を開かしめつゝ、自己は別に空拳を振つて何物か社會より叩き落さんとするの意氣軒昂なれど、急かす騒がず事に屈せず物に驚かず悠々寛々たる自然の度量中、また一片どこやらに卑しからぬ世辭愛敬ほつと備へて敵にも微笑を含ますべきは斯男の一徳、曾て汐入村に喰ふや喰はずの空腹かへて苦學難行せし時も、出す事は舌も出さぬといふ無慈悲の因業家主を説き伏せて半

歳の店賃を帳消にせしめたる腕前、また一粒の貸賣もせぬと吐鳴つた米屋の主人を抱き込んで俄に四斗俵を寄附せしめたる働きの凄さ、氷の如く冷え切つたる質屋の番頭を感泣せしめて屑屋も應ぜぬ古拾一枚を三圓の質草に埋め込んだる早業、いつも他の四人が萬事こゝに休すと叫んで手足を縮めし難關には自から出かけて最後の大役を引受け一方の血路を開きし往時を思へば、まして今の境遇に今の川上三吉が門外の前途その身に取つても人知れぬ快や幾何、されど人間智力の外に成敗の数を繰る運命の神は吉凶いかに斯好漢を迎ふべきぞ、

四方へ出入の便あつて加之も車馬風塵を避け、萬事うき世に近くして騒がしからぬ雅俗折衷の地を求むれば、まづ其うちの一として數へらるべき濱町河岸の一構へ、間口よりは奥深く外面よりは家内の結構に意を用ひて、門前の表札に富田正次といふ文字

さへ木地の年數と墨色の配合いかにも落付いたる體、いふまでもなく主人は當時二四の會社銀行に關して重役を遁さぬ五十以上の半白紳士、されど其表札に並びし川上三吉の四字は墨痕いまだ新にして近來の筆跡、また従うて社會の出入なほ日は淺しとぞ知られぬ、

同じ門内ながら正面の母屋と離れて立關脇の庭木戸より飛石傳ひに通ふべき一棟三室の新座敷、これを川上夫妻が平生の居間とし朝夕の起き臥しとして、五年以來の春秋を人には漏らさぬ閨の月雪花に送りしが、人事世上の風物いつまでこの夢の圓なるを許さず、今や其良人をすゝめて門外に誘ひ出さんとする折柄、妻たる芳子もまた今年二十四、昔ながらの文金島田ならねば、丸鬚の根も固く浮世に馴れて、ねエ良人といふ聲さへも何とやら仔細けに聞えぬ、

倉橋幸藏が海外萬里の一大飛躍を横濱の埠頭に見送りし昨日の今朝、我もまた壯心勃

勃たる無言の氣焰もろとも煙草の煙を天井に吹きあけながら、春いまだ寒けれど障子を明け放ちて庭前の梅花、これを花の魁と見るも勇しく、おもはず獨り笑を含んで何をか思案の折柄、下女が運びし朝食の膳を受取つて妻の芳子が手馴れし役目の給仕、

「さア良人、召上れ」

「いや今朝は止さう、なアに別段、どうも無いがね、喰ひたくないからさ、時に今日は上田と吉田が来る筈だから、何かね、面倒でも晝飯の菜を考へて置いてくれ、あの黒田の奴も来るだらう」

「おや、黒田さんも入らッしやいますの」

「は、來るよ、來るに相違ない、しかし彼奴は何處の方面でも嫌はれる奴だ、可哀さうに彼奴だッて、まさか生來の腹に毒を貯へて人に吹ッかけるほどの悪い奴で

もないが兎角あの調子だから困るよ、しかも憎まれ者が却って世に幅をする凡例で、上田の質朴にして潔白なる哀れを含み吉田の慇懃にして謹直なる性を備へしに引き換へ、彼奴は何事にも出過ぎて無遠慮の横着野郎、いやはや汐入村以来の難物だ、今度あの倉橋が置土産に残した一萬圓の金に付いても、上田と吉田の分は乃公が受取ッて預ッたまゝ、今日あらためて二人の意見を聞いた後、その次第に依ッて便宜上なほ乃公の手から監督かたく時の必要に應じて支出せうと思ッてるが、さて彼奴ばかりは別物として出發以前、既に本人の倉橋より三千五百圓を渡さした、つまり事の面倒がうるさいからで、また彼奴の分を上田と吉田の分に混じて乃公が手許に置けば、必ず債鬼の如く日夜に迫ッて来るのみか例の野心で二人を攪亂するの恐れあるからだ、はゝゝゝゝどうしても厄介物だよ、おのれの骨身を絞ッて作ッた金は兎も角、夢かとはばかり不意に飛び込んだ三千五百圓、その費途が想ひやられるさ、

ねエ」

「ほゝゝゝゝ、何も妾が黒田さんに對して、どうか斯うと差出がましう申す事も御坐いませんが、同じ三人の方へ等分にする筈の一萬圓を、あの黒田さんにはばかり良人、三千五百圓、すると残金は三千二百五十圓ついで御坐いますねエつまり上田さんと吉田さんは二百五十圓ついで御坐いますのねエ、なるほど吉田さんは年も若し、また修業中でもあり、勿論また皆さんと同じ苦勞を長くした人でも御坐いませんから、二百圓や五百圓の差は當然かと思ひますが、何故あの上田さんが黒田さんより少いのでせう、それも本人の倉橋さんが持つて生れた資産の内から直接に分配でもなさる事なら、どんな不公平があらうとも構ひませんが、いはゞ良人その一萬圓も妾等夫婦が内々いろくくと骨を折ッて出来た一萬圓、關係がないどころぢやア御坐いません、實は媒酌の役目で、しかも其倉橋さんには大臣の令嬢を取持ッ

て洋行まで良人、おさせ申しながら、上田さんには妾が多年召使つた下女の清を、まるで押し付け業のやうに仕たばかりか、今では親子三人あの通り足らぬ勝の不自由な世帯ですから、縁とはいふもんの何だか氣の毒で堪りませぬよ、第一、良人と妾が斯うなつた原因も上田さんでせう、その氣の毒な恩のある上田さんより獨身で氣樂三昧の黒田さんに何故お金の多い必要が御坐いますの、今も現在、良人の口から彼奴は實に困つた奴だ三千五百圓の費途も思ひやられると仰しやるほどの人、その黒田さんと質朴で潔白で萬事に哀れな上田さんとの差別が分りかねますから、こればかりは是非とも伺ひたう御坐います、決して妾は清の味方するでもなし、また意地になつて上田さんの肩を持つでもなし、全體この事の出来上らない以前にも、外の人達には子といふものが御坐いませんから、上田さんには子の分を取つて置いて下さいと前々お願い申して置きましたに、もしそれが叶はずば三人といはず良人

も這入つて四人分に分けた上、その一部を妾に下されば妾から清に遣りたいと、あれほど願つて置きましたに、あまり酷う御坐いますワ、倉橋さんも倉橋さん、平生のお言葉とお人品にも似合はない事、何だか妾は口惜しう存じますよ」

さらぬも温順貞淑の生來、まして其身は生家の一人娘といふだけ猶更ら以て萬事に控へ目の芳子も、此時のみは聊か柳眉をあけて良人に迫りし風情、しかも理の當然に流石の川上も思はず容を動かしながら、さて幾度か無言に首肯いて後、おもむろに説き出しぬ、

「や、さういへば實に其通りだ、さらに一點の無理も無い、上田夫婦に對する和女の情としては正に斯くあるべき筈だ、しかしね、そもく我々が汐入村以來の交情また別に理由があつての事さ、つまり上田は萬事あの如き男で加之も妻子を抱へて貧乏世帯に追はれながら、あの黒田めは萬事あの如き横着野郎、とても人物と境遇に

於ては同日の論ではないが、さて金の必要といふ點に於ては寧ろ上田より黒田の身に多い、一方は餘分の金なくとも其身の清貧に處して君子めいたるところ一種自得の安心を知つて居る、なれど一方の奴は俗氣満々たる由來の野心勃勃々、幾度か仕損じて果は最愛の戀女房を失ひ自己の身も死に損つたほどの大病に出逢ひながら、猶かつ屈せず恐れず驚かずして間斷なき惱中に煩惱の火焰を吐きつゝ、日夜の無事に苦しむ奴、さりとて元來が理想中の人間でないから今日の社會に對つて最も強く最も激しく金力の効を感じ急に渴して折柄だ、ね、その成敗は別論として、もし彼に平生の横着と従前の失敗さへなくば、上田と吉田に説いて實は一萬圓の半分も遣りたいところだが、件の如き男だから三千五百圓、わづかに二百五十圓を他の二人より多く與へたのは倉橋と乃公が情に於て殊更ら斯くしたのだ、ね、わかつたか、しかし和女のいふところは全然いち／＼道理至極に聞き取つたから、あの吉田へは二

千圓でも宜い、上田夫婦に殘金の四千五百圓、つまり黒田より千圓も多く遣らうかね、手加減は萬事この乃公にあるこつた、しかし上田の上田たる所以、例に依つて自己の少きに不平はいふまいが、さて自己が獨り分配の多きは喜んで受取るまいよ」

「あれ、さういふ思召とは存じませんから、つい良人、女の淺い料簡で、もしこゝに倉橋さんが在らしつたら妾、どう致しませう」

「なアに倉橋が居れば却つて和女の言葉に従ひ、むしろ乃公ほどの理由は辯じないよ、しかし萬一あの黒田が此席に居つたら、それこそ大變だ、無遠慮の彼奴どんな事をするか知れない、酷い目に逢ふぞ、は、は、は、先日も根岸を訪うて、倉橋に用談の濟んだ後、ほんやりと食客的の風體いかにも哀れに思つて、ちと遊びに來いといへば、ふんと鼻頭で笑ひながら、まツびら御免を蒙る、僕ア當分のうち夫婦もんの家





つゝ、神妙に世帯道具を監督して播槌一本も落さず坂道に逢へば荷車の後押までしながら、得々として上田の許へ入り来りし時は下手な畫師の福夷に似たり、黒田健次これまでの黒田健次ならば、多年の失敗また失敗、落魄病後の身を久しく食客となつて、倉橋と上田の間に傳送せられながら、一年有餘ごろくと顛けまはりし折柄の三千五百圓、されば遠火にかけられし蝗の如く鱈の如く踊り上り飛び上り、跳ね上つて片時も座にあるべき筈はなけれど、その現金を貰ひしは我ばかりにて他の二人分は猶いまだ川上の手にありと聞くのみか、かくまで芳志を殘せし倉橋が安着の電報もなき航海中の手前、いかな奴も聊か憚る義理人情、じつと堪へて辛抱する體ありありと見えて呵し、

されど心は既に當るべからざる氣焔萬丈、はや鬼の鐵棒を得し勢ひにて、いはゞ殆ど天地丸香みの顔色、今までは夜着を剥いで引き摺り起してさへ朝の八時を聞いた事なき寢坊助が、俄に三時四時の薄暗闇より飛び起きて何をやら四邊がらくと響かし、夜は一時二時まで眞鍮煙管の雁首に枕頭の灰吹を叩き立て、をりく不意に呻るが如く吼ゆるが如き聲、うつゝでも夢でもないは飢虎の群羊を驅るに等しき野心勃勃の證據、滿腹の俗氣に上氣せて寝るに寝られぬ驚喜の苦しさ、果は上田夫婦を捉へて例の傍若無人、そろく自己が勝手の熱を吹き始めぬ、

宵の添乳に其まゝの神佛、すやくと奥の一室に睡る我子を絶えず見返りながら、吊ランプの下に針の目を寄せて良人の肌着を縫ふ妻のお清、上田は火鉢の前に腕を組んで何をか思案の體、はや夜の十一時を過ぎて夫婦こゝに暫し無言の折柄、借家住居の天井板みしくと猶更ら音高く、やがて梯子段を降り来るは例の黒田、中段より身を斜めに打屈めて差覗きながら、わけて近來は調子づいたる例の暢氣聲、

「関として音なく寂として聲なきは、もはや枕を並べて川といふ字に御寝なツたかと思ひの外、まだだね、しかし唯ほんやりと夫婦差對ひで無言の體、がらにもない癡話を演じた果の膨れツ面ぢやア無いかね、いやに古風な面相を仕ツて二人とも止せよ、何のこツた、つまらない、世帯染みた夫婦喧嘩ア人間野暮の骨頂だ、折角の糠味噌が腐ツて酸ツぱくなるぜ、は、は、は、どりや乃公が天降ツて和合神になツてやらう」

また例の狂氣殿が陽氣の加減で呻り出したと、お清は固より意にもかけず、そのまゝの針仕事に餘念なけれど、上田は思はず額越しに睨みあけて舌鼓もろとも、

「喧しい、黙ツてろ、また今時分、のこくと何の用に降りて來るんだ、食客は食客らしくして少しは物の遠慮といふ事を知れ、板壁一重の隣家は他人だぞ、この俗物め」

「や、これは驚いた、見當違ひの傍杖なンぞア聊か有難くないね、しかし上田、さう食客々々といふない、外聞の悪い、板壁一重の隣家は他人だぜ」

「何、外聞が悪い、外聞の善い悪いに氣を置く奴か、恥を知るは義に近い人間のいふこツた、犬の遠吠えでも聞いて寢て仕舞へ」

「いよく以て手厳しいな、なるほど乃公は食客だ、しかし君、この食客たるや既に前日の食客にあらず、實は近來、頻りに羽が生えて飛んで出たいが儲また浮世の義理人情、まさかね、さう我ま、自分の勝手にもならないから、骨鳴り肉動くの英氣勃勃を制して殊更に屈するところ、なか／＼辛いよ、萬夫不當の勇士が山を隔てて敵の旗影を望むに等しだ、それは儲置いて君その土瓶に冷めた番茶の出がらしでもあるかね、あらば坊主の頭を洗ツたやうな色合でも構はない、一ぱい飲みたいもんだ、何、茶はない湯もない降りて瓶の水でも喰へは少々酷だね、どうか細君、貴



「時に上田、戯談は儲置いて、社會の形勢と人生の行路、もはや我々も例に依つて例の如く惘然しちやア居られない年輩だな、俯仰感慨、思へば聊か浮世の道草を食ひ過ぎて空しく後れたるの歎ありだ、しかしまた語に曰く、よく射る者は満を張つて後に箭を發する、しかも大器晩成の言もあるから慌て、驚いて急ぐにも及ばない、つまり今が人間智力の作用に依つて最も効果あるべき全盛期だ、幸ひ倉橋の置土産に得たる矢玉を以て一戦争すべいかなア」

「なるほど、道理だ、善からう」

「さう君、冷淡の挨拶ぢやア困るよ、何だか空に向つて押すが如く、あんまり手徹が無さ過ぎるよ」

「だって道理だから道理の返答、悪くないから、善からうさ」

「は、は、は、先生どうも俄に調子が高くなつた、狂氣の相手は、しないといふ理由か

ね」

「まづ、その邊だ」

「いや恐縮、恐縮、ところで細君、貴女の思召は如何ですな、上田は上田、暫く神聖にして犯すべからざるものと封じ込んで置いて、さて由來の家政上、直接の責任、前例に依つて當家の盛衰は一切こゝに細君の活動、いはゞ女帝國だ、謹んで御意見を承りたい、かの倉橋より分配の金、そもくどういふ工合に用ひらるゝか参考のため、また次第に依つては合資協力の上あらたに何か一の事業を企てたいもんですな、交るゝ五指を弾かんよりは一拳に如かずの諺、ねエ細君」

「ほ、ほ、ほ、妾に何を仰しやつても分りませんよ」

「や、細君までが其、その冷淡至極ぢやア今のやうな讃辭を呈するにも及ばなかつた、やはり斯うなると十餘年來の知己たる上田だ、ねエ、おい上田」

「乃公は神聖にして犯すべからずだ、此ま、暫く封じ込まれて居よう」  
 「こりやア驚いた、いよく夫婦うち揃って僕を狂者待遇にするんだな、つまり黒田健次を度外の難物とし論外の厄介物として、相手にならないといふ主義を取ったな、よろしい、ぢやア度外に置かれ論外に斥けられたま、固より返答のないを承知の上で饒舌らう、仰せの狂者だから何をいふか知れないよ此段は前以て念を押すこと如件、ところで一場の自問自答、は、は、は、は、請返答をする奴がないから獨身者の故屁と一般、聊か調子ぬけて張合はないが、まだ徒らに兩々相對する無意味の修辭飾言、かの面倒臭い虚禮の用語が入らないから却って天真爛漫だ、たれ憚らず心に思ふまゝの舌三昧、寧ろ愉快だ、さて饒舌り出すところは外でもない、例の倉橋が置土産に残した一萬圓の金、なるほど僕は其うちの三千五百金を既に本人より直接うけ取ったから、敢て人の疝氣を頭痛に病むでもないが、多年の苦樂を共にして來た

間柄、わけて斯んな時は由來の交情友誼、猶更ら氣になつて堪らないよ、そもく、上田と吉田の二人が如何なる社會の方面、いかなる一身の必要に應じて散ぜんとするか、聞説、現金は其ま、猶いまだ川上の手にありと、全體あの三公が分らない奴だ、彼奴は元來、何のために君等の既得權を押へて動かさざる、法律上の禁治産ぢやアなし人事上の無能力者でなし、まさか監督も後見も入るまい、第一あの倉橋が分配の芳志に對しても、痔持の糞と一般、呵しう變に澁つて勿體ぶらず、さつさと潔く出すべきが當然だ、また君等も遠慮なく會釋なく宜しく進んで取るべしだ、取つて以て一日も早く用に供すべしだ、徒らに金の安全と多少の利を思は、彼奴よりも手固い大丈夫の銀行といふものがある、黄金で鑄た鐘と一般、いくら有難くつても眼に見て耳に聞いたばかりぢやア面白くない、むしろ火事場の古釘一本を拾つて手に入れた方が用に立つ理由だ、いやに仔細めいた野暮な伯父さんが親類後家の

勘當息子を預つたやうに、かれ川上の三公こゝに君等を管理すべき所がない、もし小人の玉を抱いて罪あるを恐るゝの意ならば、これ君等を侮辱するの甚だしきもの、もし金を持たして激烈競争に當時に危険だといへば、これ倉橋の芳志を遮つて自己が獨りの高慢面、敢て許すべからざるところだ、ちと穿ち過ぎるか知らないが更に一步を進めて考ふれば、そもく一萬圓の三分一は厘毛切捨として三千三百三十三圓三十三錢の割合、然るに僕が直接本人より請取つた現金は三千五百圓、すると君等二人の分が幾何か減つた勘定だ、是に於て乎また更に考ふれば、倉橋といひ川上といひ、その心中この黒田健次が君等二人よりも深く愛すべき筈がない、常に一個の厄介物として寧ろ嫌つて居つたは汐入村以來の證據歴々、その僕に多くして君等に妙きの理、つまり君等の分を削つてまで僕に厚かるの道理がない、こりや、君、おい上田、實は一萬圓でないよ、必ず以上だせ、金の出處は廟堂の大臣だ、し

かも大臣中の金満家と聞えた其最愛の娘が生命かけた戀男となつて一足飛ひに洋行するほどの折柄、いはゞ幸運の絶頂、まして川上が三人分配の外に超然として其數に割り込まざる邊は猶更ら怪しい、前後の事實に照らして何だか變だ、どうも妙だよ、つまり無遠慮で油斷のならない彼奴が面倒だといふ點から、僕だけに早く金を渡したらしいぜ、しかし實は證據の無いこつた、一萬圓と稱すれば一萬圓としても宜い、只その金の效用有無に就いてだ、晝に描いた餅で徒らに眺めて居たつて仕方がない、また三人おのく分けて持つて居ながら喰ひ潰しても餘り策が無さ過ぎる、こゝは一番、共同して一萬圓の事業を起さうぢやアないか、君等二人の分は僕が川上に談じて必ず取つて來る、實ア一昨日、君は川上へ呼ばれたかち現金を受取つて來るかと思ひの外、どう誤魔化されたか、空手で歸つて來た上、その事に付いて更に一言の談話も無いア、いかに川上と僕に對する深淺厚薄の差別ありとはいへ、

聊か前後の所信と緩急とを誤つて居やアしないが、あんまり君子過ぎるぜ上田、ね  
 エ細君、僕のいふところは全然その理を失つても居ますまい、また貴女は川上の妻  
 と昔の因縁さらに淺からざる關係上、もし僕が直接の談判で角が立つと思へば、  
 内々そつと此邊の意を通じて丸く平穩にね、何とか早く埒を明けた方が宜いでせう、  
 金は元來、卑しむべき物なれど貴むべき人事間の必要に應ずるがため、あらかじめ  
 却つて清く判然として置かなければ不可ない、糞を垂れる厠と垢を流す湯殿は寧ろ  
 座敷よりも清潔にすべきの理こゝにありです、つまり同じ手に入る金でも速いと遅  
 いで其間の效用に大變な相違がありますからね、また同じ金を分けて費すと合して  
 費すとの勢力上、よほど成敗に關するところがありますからねエ、上田、さうでな  
 いか、細君どうです、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、  
 瓶は外されたるまゝに情なく冷めたり、あれ、搔き探せども掘り返せども火の氣は

失せて秋の澤邊の螢に似たりか、これぢやア折角の名論も效能が薄いやうだ、大聲  
 俚耳に入らずたア斯る事らしいわい、あゝ已んぬる哉、既に萬事休して已んぬる後  
 にあらずんば、わかるまいよ、そもく満腹の經綸を誰に向うて語り誰と共に俱に  
 かせん、もはや我は我たりだ、嫌はれて説くに及ばず、いふだけ野暮だ、ものいへ  
 ば屑寒し秋風」  
 黒田の饒舌り終るや否、上田は山の如き兩の肩を揺り動かして俄の大欠伸、これも下  
 手に淨瑠璃を義理に聽かされたる如き妻を見返りながら  
 「おい清、もう蓄音機の蠟管が絶れたらしいぜ、寝ようか」  
 「さうですなエ、今お隣家の時計が十二時をうちましたよ、ぢやア黒田さん失禮いた  
 します、御免あそばせ、また明朝」  
 夫婦もろとも奥の一室に入りて襖を閉づれば、あとに取残されし黒田健次、朧月に化



け損うたる豆狸の如く、油も盡きて次第に薄闇き吊ランプの下、ほつねんとして火の氣もない火鉢の前に坐しながら、おもはず舌鼓を打てば、襖を隔て、蟋蟀が啼くと上田の一言、流石の横着漢も半泣きの澁面を作りぬ、

「とても無効だい、憐れむべし五百年以前の人」

一たび口を開けば生來の駄辯喋々として止るところを知らず、かりにも人に對へば忽ち不平満々として謹むところを知らず、正に是れ一個の狂に似たれど、その間に自然の才氣横溢して、苟も他を憚り人に下らざる意氣軒昂、しかも時に應じ事に當つて理を見るの頭腦あれば、そもく倉橋が置き土産の一萬圓に就いても、川上が境遇性質として鏢一文も身に取らざる事實、また上田と吉田の分を其まゝ保管して他日の用に供せんとする好意も、かつは自己ばかりが却つて多く現金を與へられたる理由まで、

前後一切これを呑み込んで飽くまで承知しながら、例の野心勃勃、わざと上田夫婦を唆かして竊に三人の合資こゝに一萬圓の全額を事に施さんと企てしが、さらに其效なく石佛の頭上を蚊が螫すほどの痛痒なければ、流石の男おもはず身を縮めて、すこすこごと二階に這ひ上りぬ、

## 其三

前夜あれほど饒舌りぬいても、更に何の效ないのみか、おのれは既に自己の分を得たる人情、いかな奴でも我が身を折つて、もはや斷念すべき筈なれど、蛇の如く頭を叩き潰され鰻の如く腸を割かるゝまでは往生しきれぬ男、なほも二の術の神算鬼謀に終夜枕の音を鳴らせしが、いつしか疲れて其まゝの夢うつゝ、とろくと睡りぬ、

その二階の下には上田夫婦、はや朝飯も済んでより凡そ一時間餘、妻は裏口の井戸端

に立ち出でて忙しく、良人は山の如き脊に我子を負うて、廣くもあらぬ家の内を彼方此方と歩みしが、やがて箒を取つて柄を倒まにししながら天井板を突き上げぬ、

「おい黒田、こゝら食客、起きんか、世間の人並より二時間の餘も猶豫を與へた上だぞ起きろく」

ごつぐつと音高く突き上げれば、やうく幽に寢惚聲を發しながら、かくても例の横着と無用の駄辯、

「は、は、は、折角だがね、聊か見當が違つてるよ、も少し右の方だ、一尺ばかり右の方を突いた、其處は君、枕頭でないから然のみの効がないぜ」

「や、此奴め、けしからん事を吐すわい、實に呆れ返つた奴だ、よし、ぢやア坊の慰みに引き摺り出して片手の宙吊だ」

いひつゝ二十貫目の大兵、みしゝと梯子段を踏み鳴らして上り見れば、黒田おもは

ず飛び起きて夜具の上にながら、

「お、坊や、ニコくと朝から可愛い顔をしてるね、この伯父さんは腹部が痛くつてね、つい睡眠を仕過ぎたよ、は、は、は、上田、いつ見ても罪の無いものは子兒だなア無心の笑顔、實に珠玉の如しだ」

「ごまかすな此野郎、さア起きろ、起きたく、起きて直ぐ川上の家まで行け、使が来たぞ先刻、是非とも貴様に來いと」

「む、僕に、川上が、眞實かね」

「貴様と違つて此男、まだ生れてから虚言といふもの味の知らない、早く飛び起きて行け」

「なるほど、ぢやア出掛けよう、しかし川上が何の用、そも、用がありやア自ら歩を運んで來べきが當然だ、然るに勿體らしう使者を以て呼び寄せるたア彼奴、頗る



年、いかに心を残して死んだか、されどその良人は依然として舊時の狂態を改めず、たゞ日夜ごろくと友人の許を願け廻つて未だ一つの成す事もなく、たまくと思ひ出して昔を語れば生前の泣く音を絞つて唄うた門三味線の恥辱を曝さるゝのみ、あゝ嘸や恨めしからう、生きてある時は過ぎたりと雖も其まゝ黒田の妻と見しが、死して後は我こゝに健次の妻と思ふに忍びず、たゞ一個の哀れなる島女として朝夕の心に吊ふのみ」

いひつゝ、兩眼に男泣きの涙を含めば、黒田おもはず俄に頭上より夜具を打被つて、

「上田、ゆゝ許してくれ、さう聞かされちやア堪らない」

来るなどいへば用はなくとも唐突に押し掛けて来る奴、来いといへば如何なる用があつても急には来ない奴、果して例の通りと川上は其まゝ氣にも止めず打ち過ぎしに、

その黒田が訪ひ来しといふ下女の取次、さては彼奴め近來いさゝか調子づいたるためと微笑を浮べながら、書齋に呼び入れて見れば、何とやら今日に限つて仔細らしい眞面目の顔色、平生が平生だけに却つて一種の滑稽を帯びぬ、

「やア黒田、よく来たね、使は遣つたものゝ君のこつたから迎も来まいと思つて居たよ、はゝゝゝゝ」

「御挨拶、痛み入る、しかし僕だつて時には静肅たる一個の君子人だ、わざと好んで世間の人情と反對に出るのが持つて生れた病氣でもないさ、わけて今日は聊か感ずるところがあつたため、召に應じて直ちに参上」

「あまり直ちに参上でもなかつたが、まづ君としては殊勝の至極だ、ところで今日は少々、あらたまつて話したい事がある、しかし要領は僅一二言で済むこつたから、まア悠々寛々と錨を卸して遊ぶが宜い、促さずとも酒は出すよ、久しぶりで氣焰萬

丈にも當ッて見たいさ、は、は、は、倉橋でも上田でも君を以て只、いたづらに小田の蛙の啼く音と一般、喧しいばかりで何の功もない無用の饒舌家とするが、由來この僕は君に對して蛙や蛇の蟲類待遇はしない、やはり人間待遇で落語の前坐よりは多少の聽くに足るべきものとして居るからねエ」

「なるほど、や、十餘年來こゝに知己の言さら空しからず、全く君なればこそだ、しかし今日は酒も促さない、また氣焰も吐かない、いはゆる落語の前坐も勤めないから、わざと使者を馳せて僕を召し寄せた大々事件の要領を言ッてくれ、實ア少氣分が變でね」

「は、は、は、無効だよ、さう俄に眞面目臭ッたッて平生の手前、やはり例に依ッて例の如き調子で無遠慮に遣ッてくれ、たまくと狼の衣を着たるが如きは却ッて面白くない、寧ろ君の君たる以所を失ッて平々凡々たゞの人間になるから、おい芳、芳

は居らないか、誰でも宜い酒を出せよ、珍客だ」

汐入村の破巢に空腹を抱へて苦學難行せし昔より今に至るまで、一個の別物として誰の手にも足にも合はざる流石の難物なれど、この川上に對しては叨りに例の横車を押し出さぬのみか、をりく不意に眞向額口を一本まるられて、ぐうの音も出ぬ事さへあれば、彼奴は乃公の苦手と稱して常に閉口頓首の體、されどまた此横着漢の本領を知ッて、その中に一點の用ふべきところありと稱するものは川上三吉、寧ろ人生の逆境に立てるを憐れんで人知れぬ同情を寄せぬ、

されば川上が生來その深沈にして無言の雅量あるにも似ず、この黒田に對ッては殊更ら自己の性に反して縦横無盡の詭辯喋々、倒しまに饒舌り倒さんとするが如くなれど、しかも一片の友情を失はずして徐ろに護り立てんとの好意、招けば嗜むところを與へて忽ち酒を呼び、語れば常に醉を進めて頭腦活氣の快哉中に圓轉たる言外の諫争を注

ぎぬ。

やがて用意の酒肴を取り出して妻女の芳子も座に出でつゝ、平生より氣が早くて口に毒ある人と思へば猶更ら、良人と共に馴れ馴れしう打解けて盃を勸むれば、黒田健次おもはず苦笑ひしながら、酒は飲みたし座は面白からずといふ顔色、をりく眼を瞬動いて煙に咽ぶが如し、

「こりやア川上、どうも飛んだ不意の御馳走だな、わけて細君のお酌、いよく恐縮だよ、君、捨て、置いて貰つてくれ、慣れむべし斯男、さても其後さるほどに眞白の柔和い細い手の酌味は忘れて仕舞つたよ、は、は、は、獨酌々々」

「なるほど、さうだつたね、こりやア乃公が悪かつた、おい芳、元來この黒田はね、和女が嫌忌だよ、こゝは此まゝにして彼方へ行つた方が宜からう、とかく氣に入らないもの、お前ぢやア酒の味が出ないさうだ」

「おや、左様で御坐いますか、それは却つて失禮いたしました、黒田さん、少しも存じませんから、平に御免遊ばして」

「おい、おい、川上、戯談にも程度のおつたもんだ、よせよ、ば、馬鹿な事を、君のためには隔てのない夫婦でも、僕ア他人ぢやアないか、ねエ細君、どうも困りますよ、何故か川上は昔から僕ばかりを目の敵にして窘めますぜ、は、は、は、ちと吐つて戴きたいですな、しかし堂々たる男兒たまく、女に吐られて閉口する境涯が人生の一快事だ、僕なんかア吐り人もなし譽め人もなし、日夜たゞ残酷な浮世に攻められて四面楚歌の聲を聞くばかり、あゝ思へば寂寞の感ありだ、ねエ細君、いくら何でも少しは憐れな奴と察して下さいな、は、は、は」

「なるほど黒田さんは萬事、ごまかす事がお上手なこと、いつも妾の讒訴を仰しやる癖に、彼女が居るから川上の家へ行くのが癢に觸るなぞと貴君、お覚えが御坐いま

せう、ほゝゝゝまた貴君だつて立派に吐ツたり譽めたりする女が在らしつて、しかも大變、貞女な女だつたといふ事を兼々承ツて居りますよ、それが、お可哀さうに、御苦勞甲斐もなく、お死去あそばしたさうですネエ、もし生きて在らつしやれば、お心易くして戴いて、いろくお世話になるんです、ねエ良人」

「むゝ全くだ、この黒田は斯んな妙な顔で裏か表か判然としないやうな面だが、さて其女、その戀女房は和女、なかゝ美人だつたさうだ、あの無口な上田でさへ口を極めて今なほ譽める位だから、よほどの尤物で貞女だつたに相違ない、それを此奴が有難いとも思はず、實に言語道斷、いふに忍びざるほど散々の苦勞をさして、泣いてく泣かした結果に、とうく殺して仕舞つたのさ、罪の深い男だ、しかし悪運の強い奴で、罰も當らず自己だけは生き伸びて加之も今日まで無事に食客を通せたのが不思議ぢやないか、時に其、あはれな貞女が今まで居れば幾歳になる、たし

か二十六で死んださうだね」

流石の黒田健次おもはず差俯いて、手に持てる盃の中、じつと打守りながら、果は眉を寄せ兩眼を閉ぢたるまゝ、満身の太息を漏らしぬ、

「おい川上、そんな事を言つてくれるな、今朝も今朝、さうざ上田に遣られて來たところだ、どういふもんか今日は二度も同じこつて攻められるよ」

「はゝア、もはや上田に散々、やられて來たのか、ぢやア言ふまい、いくら君でも心持が快くあるまいからねエ、しかし變な日だな、俗にいふ草葉の蔭より何とか思つてる一念の業であるまいかね、もし命日に當らずとも何か君の心に思ひ當る事でもある日ぢやアないかね 考へて見ろ、二月の十八日だ」

二月の十八日といはれて黒田健次、ふと思ひ出せば、さても不思議や、本所の片隅へ落ち込んで我は大病に犯され其日の食にも盡き果て、お島が古三味線に露命を繋ぎし

時、忘れもせぬ今月の今日、わけて其夜は北風強く肌寒く加之も星の影さへ洩らさぬ雨雲に何處の軒を唄うて彷徨ふやらと、病める枕を敬てし折しも、やうく歸り來りし彼の哀れさ悲惨らしさ、苦勞の果の貧苦に窶れて古拾一枚の裾も合ひ兼ねたる左の脛に血汐の痕、はつと驚いて問へば、さめくと泣きながら或屋敷の門前で小牛のやうな洋犬に噛み付かれしとの事、なるほど二月の十八日、あゝ今日の今夜なりけりと胸に浮べば、お島が其時の姿ありくと眼に見えて、流星の横着漢ぞつと骨まで寒く五體を震はしぬ、

黒田が兩眼に含める涙を見て、川上おもはず振り返りながら、眼に物いはせて妻の芳子を追ひ拂へば、それと察して靜に其まゝ彼方へ去りし後、さらに膝を進めて、

「おい黒田、つまらない事を言つて氣を悪くしたやうだが、また偶には氣の悪くなるのも却つて君の爲だらう、全體、君は餘り萬事に就いて暢氣過ぎるよ、なるほど男

は洒々落落々、事に縛せられ物に制せられて日命たゞ敵に追はるゝ如きも妙でないが、さて徒らに無責任な粗大散漫の頭腦から割り出す不節調な暢氣さ加減は無効だよ、しかし君を以て強ち其人といふぢやない、ないがね君、駿馬の手綱なきは寧ろ犬豚に劣るの事實で、可憐ら君が人に過ぎたるの才氣を持ちながら、惜しむべし其才氣が聊か横溢汎濫に失するかと思ふ點があるぜ、つまり今日、君を呼んだのも實ア此邊の事を諫めて、否、たゞ坐興半分は談話をして、今後、君の取るべき方針を聞きたいと思つたからさ、幸ひ倉橋が置き土産に残して往つた芳志の三千五百圓、無論逆も君が前途將來の活動を助けるほどの金ぢやアあるまいが、またこれ用ひやうに依つては尠くない金だ、ところで其金を君、どういふ工合に用ひる心算か、酒でも飲みながら試みに聞かしてくれ、まさか其金を積んで置いて喰ひ缺く君でも無からうからね、いくら平生は互に毒口を吐き合つても、こゝが即ち汐入村以來いふに言



はれぬ十餘年來の友達だ、渡すべき金を渡せば其事で宜いたア思へない交情だからな、は、は、は、どうだい黒田、いやに沈んで妙に濟まし込んだぢやアないか、ぐつと熱い酒を飲め、飲んで大に語れよ」

いつになく悄然として無言のまゝに頭を垂れしが、やうく顔をあけて淋し氣の微笑を浮べながら、

「いや、全く今日は變に調子が浮かないよ、しかも君が言いちく胸に迫るの感ありだ、實ア前夜も前夜、あの上田と吉田の分まで引き摺り出して合資的の一事業を起した上、僕が全權を握らうといふ悪い企謀を抱いて居ったがね」

「そウら、それだから不可ない、もし、さういふ企謀でもありやア何故この川上を偽すなり欺くなり君の腕に掛けて翻弄しない、上田の如きは正に一個の敬すべき君子的で吉田は今なほ孜々たる校舎の青年、甚だ卑怯だぞ、寧ろ残酷だぞ、そもく合

して一の事業を起すくらゐなら、わざく最初より三人に分ける必要が無い、また僕が二人の分を預つて居る必要も無し、第一が君一人に多く早く現金を渡すべき必要が無い、しかし此邊の理由は言はなくつても萬々よく心得て居る筈の君が、承知の上で企て様とするに至つては猶更ら酷いぜ、は、は、は、よし巧みに二人を抱き込んだところが無効だ、生憎この黒い眼が睨んでるからな」

「だからさ、は、は、は、だから今は断念して仕舞つての白状だ、ついては僕が貰つた三千五百圓の問題、つまり用途如何の問題に對して、眼前こゝに君を首肯せしむるだけの覺悟は無いが、そもくこの三千五百圓は上田吉田と違つて倉橋より君より黒田健次への縁切金といふ事だけは正に承知して居る、これを無用の浪費に散ずれば斷乎として交りを絶つべし、これを有用に供して一身自立の基礎とすれば由來の交情さらに一段を加ふべし、といふ以上の二點にあるんだらう」



「いや、古草鞋でも釣り上げる勢ひがあつて始めて大魚を得べしだ、僕なんかア久しく河岸ツ端を彷徨くばかりで、あけくの果は這つて落ちて魚の餌食になりさうだよ、は、は、は、とところで如件いよく決心した以上、もはや上田の許に食客の必要もないから近日、あらためて飛び出すが、さて出た上は暫く音信不通になるかも知れない、その邊は悪しからず思つて貰ひたい」

「勿論、互に成敗の決を取るまで逢はない方が却つて面白い、たゞ身體を大切にして腦を損じないやうにしろ、物を容れるには器が大事だ、但し清い水で幾度も器の底を能く洗つてね、而して後あらたに盛り入れるんだ、前の腐つた糟粕が残つて居ちやア不可んぜ、つひ悪臭がうつるから」

「清水どころぢやアない、磨砂で本性の出るまで洗ひ曝して盛り込む覺悟だが、儲どんなものを盛り込むか、思やア我ながら覺束ないこつた、ぢやア川上、今この席を

出陣の盃として一獻、さすぜ」

「いさぎよく、うけるぞ、なみくと酌いでくれ、こゝは一番、起つて舞ふべきところだが野暮漢さらに藝無猿だ、しかし苦勞人の君どうだ、門三味線まで弾かして来た戀の果の世話女房に一つや二つの踊舞は習つたらう、は、は、は、萬事あらためて出る既往の罪亡しに見せてくれ」

「倉橋や上田の面前と違つて君の面前だ、ざんざ馬鹿を盡した糞白癡の總仕舞に、ちよいと跳ねて見ても宜いがね、まア止さうよ、細君に覗かれてもすると他日成業の曉に威嚴を損ずるの恐れありだ、は、は、は、」

## 其四

よしや名玉ならずとも、元來の石瓦にあらぬ男、こゝに塗れし垢を去り泥を拭へば多

少の光輝を放つて、再び此まゝの黒田健次では訪ひ來ぬ覺悟の心機一轉、送り出せし川上夫婦を見返りて、しかも既往にない慇懃の挨拶、平生は脚をあけて蹴飛ばす筈の奴が今日に限つての優しさ、折しも駈け來りし飼犬の頭まで撫でつゝ、こりや他日この乃公を見違つて吠ゆるなと戯れながら、翻然として立出でぬ、

さらば今日、あらためて上田夫婦にも由來の恩を謝し罪を謝し、また前途將來の志も告げ身も誓つて潔く立出でん、汐入村以來の離合集散、いづれ誰彼の厚薄はなけれど、天性かの涙脆き眼より一入さらに我を見るものは上田なり、わけて正直一途の心に照らして節度なき我を惡魔の如く罵れども、日夜念々この我を思つて捨てざるものは上田なり、我は垂死に病に臥し妻は朝夕の飢に迫つて本所の片隅に落ち果てし時、あの五尺八寸二十貫目の山に似たる大兵を驚かして小兒の如く泣きながら我を救ひ出せし慘澹の友情、もとより倉橋の深沈に及ばず川上の雅量に及ばず吉田の勤勉に至ら

ざれど、單純高潔にして眞實の涙に熱きは以上の三人に高く抽んでたる彼の特質、あ過ぎし多年の我行爲を思へば、たとひ親兄弟といへども彼の情には如かざるべしと、今更ら上田力の爲人を知るにあらねど、何とやら俄に我身の罪深き心地して、天に唾を吐くべき男が悄然として差俯きながら、歩むともなく歩を運んで兩國橋の畔まで歩み來りぬ、

折しも橋の上にて頻りに叫ぶ人聲、同じ橋上ながら片側の人道を歩みし健次、ふと何心なく見上ぐれば、車夫と車夫と梶棒を突き當てし争鬪に、東西より勢ひ込んで曳き來りし幾輛の車は其まゝ前後に押し重りて暫し立往生の體、しかも本所の方より三臺目の乗客は一人の美人、や、不思議や死んだ筈の我妻、お島なりける、  
亡妻には姉妹なし、まして既に死せしもの、再び生きて現世にあるべき筈なし、さりとて不思議や、見れば見るほど其まゝの風情、心の迷ひか、氣の狂ひか、さても怪し

や、見れば見るほど其のまゝの顔貌、くつきりと色白く富士額の水際立って、持て餘すほどの黒髪を惜し氣もなく引き詰めて加之も前髪さへ取らぬ短氣の蝶々、いきくと張り切つたる黒眼勝の眼元に笑はねど左の頬の片笑渦、や、首を前に俯し加減の體といひ撫で下したる地藏肩といひ兩手を膝に重ねて固く持ち合はしたる癖といひ、をりをり物を見る毎に眉を蹙めて唇端を結ぶところまで、肖たも肖たりけり瓜兩斷とは世の諺、これは正しく兩斷に割らぬ其まゝのお島、赤地の子持銘仙に襟をかけて大島紬の縮入羽織は聊か狭なれど、また亡妻が一時かゝる風姿もありと思へば猶更ら其まゝのお島、數ふれば歳こそ生きてあるべき歳と違うて今年やうく二十三四なれど、川風に散る鬢の毛を搔き上げし懐しさの手許まで、あゝ何者の妻か、何者の情に圍はるゝ戀の身か、餘所ながら只一言の素性を知りたし、その男の面を一眼なりとも見たし、

これほどの女、捨て、置く者なく棄て、置かるゝ筈なく、あの風情、いづれ身を洗へば尋常の堅氣の素性は持つまじけれど、肖れば肖るものかな一腹より生れもせぬ無縁の他人の面相、あればあるものかな斯くまで肖たる女の生きて世にあらんとは、嗚や其氣質も聲も思ひやらるゝ我妻の形見、やがて流れの末の浮ばぬ淵瀬に沈むべき同じ不運の女かと思へば、今昔の感に打たれて胸を割かるゝ如く、まして上田といひ川上といひ、不思議に今日は同じ我亡妻の在世を語って我を泣かせし今こゝに何たる縁ぞ、さても怪しき日なりけり、人や見る我顔いかにと俄に歩を早めて打過ぎしが、また我を忘れて振り返れば、曳き出す車上に揺られて彼方ら何心なく見返る目元唇端、はつと思はず驚いて脚下の石に躓きながら、南無三寶、危し危し、いざや志を改めて浮世に出直しの男一疋、靜に懷中へ兩手を差し込みつゝ、銀行の當座あづけ三千四百圓券と百圓の現金、飛び去るな抜け出るなと固く掴んで一散に遁け出しぬ、

過日 倉橋の萬里飛躍を横濱の埠頭に送りし翌日、三人もろとも来いと川上より招かれし時、一萬圓の置き土産と聞いて先登第一に跳ぬ出すべき筈の奴が、おのれ一人の分を既に現金にて得しがため、さらに振り返りもせず、肱を枕に晝寝しながらの毒口、折角の金に今更ら入らぬ文句は有難迷惑の添物と、例の唇端を反して吐したるほどの奴なれど、鬼の眼にも涙とやら、死せし妻の事さへ言へば忽ち平生の勢ひを失うて、俄に凋るゝ體が彼奴まだ人間に遠く去らざるところ、されば今日かの川上が一口に呑吐せられて如何なる面やすべき、あゝ彼を情に於て救ふものは我、彼を理に於いて説くものは倉橋、彼を一喝の下に叱咤して顔色なからしむるものは川上なりと、上田は上田さて昔ながらの上田先生力の君、何心なく門口を見れば、いつの間に歸り來りしか、黒田健次、たゞ惘然として腕を組みつゝ軒下に立ちぬ、

「おい黒田、何を其處で惘然と立ッてる、出るなら出るなら這入るとして、どツちか早く身體の始末を付けろ、店頭邪魔だ」  
 「なるほど、さうだな、こりやア悪かつた、例に依ッて無用の厄介物、さぞ蒼蠅からうが入れてくれ、やうく今、川上から歸ッて來た」  
 「は、は、は、意氣銷沈、よほど酷く遣られたな、よからう、君のためだ、さア茶でも飲め」  
 「有難いが、何だか今日は妙に調子が沈んで變に頭腦が痛いから、此まゝ二階で」  
 「ならない、また晝寝だな、叩き起すぞ」  
 「いや、寝るんぢやアない、決して寝ない、横になるどころか、實ア奴、聊か途中で面くらッて歸ッて來たんだ、は、は、は、なアに糞、心機一轉、奮勵一番」  
 「ふ、ふ、ん、また例のお株を遣ッてるぜ、君の心氣一轉は多年さんざ聞き飽きた、一轉

三轉さらに七顛八倒、これで凡そ十五六轉だらう、奮勵一番の前に面でも洗へ」  
 「や、一言なし、しかし實際に寝ないから、どうか二階へあがつてくれ」  
 「無効だ待て、おい黒田こら待てといふに、暫時この火鉢の前に端坐して川上に言は  
 れて来た事いちくく白状しろ、蛙面馬耳郎、今聞いた事を今すぐに忘れる性分だか  
 ら、乃公が復習さしてやるのだ」

「いや今日といふ今日は断じて忘れない、忘れろと言つても忘れない、あんまり脳に  
 染み込み腸に徹へ過ぎて只もう御覽の通り、ほつとするくらゐだ、許してくれ、人  
 なき二階の片隅へ頭を突ッ込んで我た、獨り沈黙考、よほど落着いて靜に心を前  
 途に置いた上、さらに深く思ひ切つて考へないと君、頗る危いところだ、今や足を  
 爪立て、千仞の巖頭に佇立せる前後一瞬の一足、や、畜生、なアに男だ、はッはッ  
 はッはッ水の流れ急なりと雖も境は常に靜なり花は落つること頻りなりと雖も意は

自ら閑なりだ、骸骨め何が面白さに皮一枚を贖やアがる、ふざけるな、いや上田  
 失敬するぞ」

いふや否、拳を握ッて自己が胸を叩きながら二階へ駆け上りしが、慌て、足踏み込ら  
 して、どつと梯子の中段より顛け落ちぬ、

「痛いッ、畜生め痛いぞ」

痛いくと叫びながら、また其まゝに這ひ上つたる黒田の體、酒でも酔ひ喰うての上  
 ならば此奴の性として珍らしからねど、眼前あまりの不思議さに上田おもはず眉を顰  
 めて太き首骨を捻りながら、暫し天井を睨みあけて默然たりしが、折しも裏口より入  
 り來りし妻のお清を見返りて、  
 「おい、どうも變だぜ、黒田の奴が、和女、ちよいと見て來てくれ、何だか調子  
 が狂つたやうだ、いつもの恍惚さ加減と少々、違つてるやうだぞ、そつと覗いて見

ろ

「おや、どうしなすったんでせう、しかし妾は御免を蒙りますよ、外の人なら兎も角、あの人が良人、あの上、變に調子が狂って堪りますもんか、危険ですよ、ほ、ほ、ほ、ほ、ほ、ほ」

「は、は、はなるほど、さうだな、何事もない眞面目の時でさへ世間普通からは餘程、變った奴だからなア」

「さうですとも、うツかり覗いて咽喉笛でも喰ひ付かれたら大變ですよ、ほ、ほ、ほ、戯談は儲置いて、全體どういふ工合ですの」

「どう斯うツて口で言へないが、随分、をかしい様子だ、よほど變ッてるよ、ぢやア乃公が見て来てやらう」

「お止しなさい、いつも言ふ通り黒田さんには萬事、關はないに限りますよ、まして

良人、さう變に調子の變った時は猶更ですよ」

「いや、さうでない、やはり彼奴も乃公の朋友だよ、善惡ともに捨て、置いちやア濟まない、しかし面倒な奴だ、昔から手數ばかり掛ける野郎だぜ、何でも今日は川上に取ッ捕まッて脳骨が割れるほど遣られたらしいわい」

元來の無口なれど川上の性、口を開けば人の腸を抉ッて雄辯滔々、わけて黒田に對ッては何の會釋あるべき筈なく、時には頭上より大石を抛つが如く罵る事あれば、また黒田の性として根性骨の横つ突ッ張つたる奴、さらぬも川上を汐入村以來の苦手として常に一步を譲りし心中、猶更ら自己の癡癡に觸へて激しく頭腦を刺撃せし餘り、或は無用の憤慨に迫ッて一時その常態を失せしかと、果は思はず眉を蹙めながら、そツと梯子段を這ひ上ッて見れば、や、此奴め、現に今も今、決して晝寢はせぬと吐した舌の乾かぬに、はや夜具を引き摺り出して何處が頭やら足やら、只これ團々たる一



個の小山、をりく地震の如く動きぬ、

かくと見るより上田そのまゝ立寄つて、二十貫目の大兵、づしりと夜具の上に乗し掛れば、さながら磐石をもて打たれたるが如く、ぎやツと叫んで動きもならぬ蒲團蒸の刑、苦しき息を絞つて半泣きの聲、

「たゝ助けてくれ、おい上田、敢て、決して晝寝ぢやアない」

「この横着漢め、これが晝寝でなくて何だ、もはや起きるにも及ばないぞ、このまゝ夜まで寝ろ、汐入村の昔日と違つて妻子ある乃公だ、兒戯に類する事はしたくもないが、貴様のやうな奴ア矢張り狂を以て狂を制しないと無効だから、さアどうだ、どうだ、どうだ」

「やア苦しい、痛い、ほゝ骨が、そこらに細君は在ないか、在らツしやいませんか、骨が碎ける」

「世の中に痛いばかりが苦しいと思つてるか、嚙アは居なくつても骨は死後で乃公が拾つてやるから安心して堪忍しろ、それとも立派な申譯でもあるか」

「ある、確乎に君、あるから兎も角、許してくれ、腕力ぢやア逆も叶はない」

「この野郎、腕力の外に何か叶ふ事があるか」

「いや、御坐いません、一切さらに無し、しかし晝寝にあらざる申譯はあるから君、暫く刑を免してくれ、骨が曲折れるやうで、息が詰つて堪らない、たゝ最期の際の一言だけ」

「いやはや、どうも呆れた奴だ、ぢやア暫時の間、特別の詮議を以て許してやるから川上に言はれて来た事、いちく白状しろ」

「する、致します、仕る段か更に一步を進めて眞面目に言ふ事があるから、君また眞面目に聞いてくれ、もう互に君、ふざける年ぢやアないよ」

「知れたこと言へ、誰が此年輩をして馬鹿々々しい真似がしたいもンか、狂人奔れば不狂人また走る、いつも貴様のお蔭で狂ふんだ、まるで狂氣の黴菌に等しい奴だ」

川上に呼ばれて酒を出されし上、これぞ多年の交情を断つか絶たぬの境に諫められし事、また今日こそは自己も胸を割つて腸の底より答へし事、いちく語り出せし體、さらに平生の輕辯浮華に渡らざるのみか、果は兩眼に涙を含んで由來の恩を謝しつつ、奮勵一番あらためて社會に出直さんとする前途將來の覺悟まで、膝を進めて語れば上田も肅然として耳を傾けながら、

「どうか君、その決心を貫いてくれ、例の癖さへ無きやア何處へ出しても天生一個の俊秀たるに恥ぢざる君だ、そもく、汐入村で苦學難行を共にした五人のうち、いはば僕こそ一點さらに其效なき愚物で、加之も斯の如き醉生夢死の境遇、當然この上

田が別物にせらるべき筈を、寧ろ俊秀の君が今日まで一味舊情の難物に持て餘されて殆ど度外に措かれたは何の爲であるか、それを考ふれば足れりだ、川上や倉橋は兎も角、この上田力としては唯これより外に君を諫める言葉がない、つまり資格がないから、この一言を君、冀はくば千萬無量の意味に汲み取つて貰ひたい、よしや君もし、我々の言を容れずとも、君がために可憐の生涯を過り君がために人生慘澹の悲痛を極め遂に君がために殺されたる不幸の貞婦かの島女に對しても此まゝぢやア濟むまい、その島女が死際を思ひ出して見ろ、落ちも落ち果てた本所の端の乞食小屋に等しい床の上で、一枚の煎餅蒲團に身を纏うて破れた垣根の殘花を羨みながら纔に首をあけ瘦せ枯れた手に君の手首を固く握つて何と言つた、も一度、良人が世に出る姿を見て死にたいと言つたぢやアないか、其時また君は僕に對つて何と言つた、妻は死すべき病で死んだのではない、我これを多年の苦勞に投じて弄り殺し

にしたと泣いたぢやアないか、爾來こゝに三年、そもく何を以て其靈を弔うたか、しかし過去は悔いて及ばず、たゞ將來の奮勵刷新、只管祈るぜ、これが僕と一般で根本的の愚物なら仕方もないが、君の如きは正に生來の才物だ、ね、やれば何でも遣れる人間だ、それを君、我みづから抛つて例の黒田先生ぢやア囚るでないか、つまらない、第一、惜しいもんだぜ」

「や、今日の川上といひ、わけて君の言々句々、感銘の至極だ、譬ひ其言に及ばずとも、せめて従前の黒田健次を脱却して新の人間になるから、まづ安心してくれ」  
 「倉橋は既に翼を伸して海外に飛び、川上また近々その養ふところを提けて社會に馳せ出でんとす、吉田は今なほ學窓にありと雖も日夜孜孜たる彼の謹勉、正に他日の出色を知るに足る、こゝで君が萬事を新にして、うまく遣つてくれりやア實に快だ、筑波嵐に空腹を射抜かれた苦學昔日の效こゝにありと謂ひつべしだ、僕の如き

は最初からの零で、固より數にやア加はらない、たゞ諸君が勇ましく轡を聯ねて鐵騎鏘々、當世に馳驅するの狀を望めば澤山だ、幸ひ倉橋が芳志の賜物を基礎として何等かの分に應じたる業を營み、一家三人たゞ無事に浮世を渡り其日の清貧を守れば宜いんだ、否、むしろ過分の幸福かも知れない、しかしまた隅田川邊の藪蚊に攻められながら蓮の葉の帽子を被つて満都百萬の俗物を嘲つた當時の意氣、おもへば今昔の感ありだ、たゞ奈何せん、蠢々たる我愚、こゝに妻あつて子あるの今日、あ空中の樓閣は其まゝの夢となつて今や月に五圓の借屋住居も氣息奄々、瘦馬の重荷を背負つて坂に上るが如しだ、なれど黒田、うまれた子だけは乃公のやうな無用の愚物にしたくないから、君が志を得た後は、おい頼むぜ、どうか引き立て、世話をしてくれよ、その代り今の僕ア君等のため馬の糞でも始末するぜ」  
 あゝ常に自己が涙をもて人の涙を誘ふものは上田力、一言一句その肺腑より湧き出で

て熱情の迸るところ、おのづから一種の悲惨を帯びて哀れを催せば、流石の黒田も思はず頭を垂れて暫し黙然たるのみ、奮勵一番の首途に寧ろ一場の懺悔談とし潔く打明けて語らんとせし兩國橋上の事も、また或は斯好漢に前途無用の憂を抱かしめんかと恐れて、そのまゝの無言に打過ぎぬ、

こゝに黒田既次が歸往半生の夢を抛ち前途將來の志望を新にし、猛然として勇士の馬首を翻すが如くに立出でしより二日目、小包郵便にて上田の許へ届きしもの一個、開き見れば我子のため四季に用ふべき四通り分の縮緬地を重ねて、その間に一封の書状を添へぬ、

いかに志を改めても何とせん彼奴の本性、あゝまだ幾分の白癡さは五體のうちに残れり、そもく倉橋が芳志の三千五百圓、かゝる浮世の見え透いたる片々無用の義理

をせよとの爲か、また上田が一子の四季の寒暑を防ぐべき綿布ならば兎も角、かゝる華奢の縮緬地とは彼奴まだ舊習虚飾の脱却せざるところあり、咄、馬鹿野郎と叫びながら、その書状を披けば、わざとならぬ自然の筆力、墨痕淋漓として大人の書風を帯びたる體、こればかりは昔より五人中の隨一、しかも文は例に依つて其人の如く格を破り章をなさずと雖も、縦横自在の間に一種の霸氣を含み奇氣を横たへぬ、

この一書これを敢て君が平生肅坐の左右に致すべき意なし、たゞ時に戯れて横町の犬を呼び隣家の猫を追ふの閑あらば、乞ふ一讀の榮を賜へ、たとひ天下を罵倒するの舌あり鬼神を感じしむるの文ありと雖も、多年の愚狀、由來の狂態、君に對するの健次としては更に筆舌を有せざればなり、もしそれ則の無聊を慰するがために讀み、讀んで而して後、忽ち其用を辨ずれば猶さらに可なり、

回顧す汐入村の昔、既に諸君の意に反いて驥尾の幸を脱し、竟に一片の書を止め、同情の窟を去り、聊か以て別に爲すところあらんとせしが、七年の星霜、觀じ來れば果して何をか爲す、古來の失敗者は多く過去を顧みて一場の夢といふ、夢か夢か、健次の夢や覺めて痕なき能はず消えて跡なき能はず、しばし立脚の地を失うて徒らに可憐の貞婦を窮巷の飢餓に死せしめ、幾度か初志の誓に反して空しく、病餘の一身を諸君の舊情に救はる、しかも猶いまだ貞婦一日の靈を慰むることなく諸君一日の恩に酬ゆることなくして今日に至る、咄々この舊阿蒙、嗚呼いづこの門前に泣いて誰が家の柳を攀ぢん乎、人は言ふ、生きて世に効なきものは死するに如かずと、されど健次の如きは死して猶かつ効なき者なり、「死んで此世の埒があくならば」豈それ一死の易きに躊躇せん、「死ぬに死なれぬ業ざらし」とは正に罪深き今日の我、徒らに死して濟むべきや、いふ勿れ「娑婆塞ぎ」と、

生きて効なき五尺の娑婆、塞げど透明無色の空氣は五尺の我を容れて價を求めず、たゞ我こゝに屍となつて骨を埋むれば三尺の穴それ幾何の價なくして可ならんや、願はくは此形骸を埋むべき三尺の地價を拂うて後に死せん、願はくは此一身を容れ來りし五尺の空氣に惜しまれて後に逝かん、健次こゝに歳三十二、人生五十年の言を數ふれば既に半を過ぎ、古來稀なる七十にして三十八年を餘し、三萬六千日を猶かつ朝露に等しとすれば、前途將來さらに石火の間一髪にあるのみ、あゝ日は暮れて途遠しの歎なからんや、されど幸ひに得たる倉橋君の賜物は以て過去の遅々を補ふべき舟車の便あり、もし只こゝに方向を誤らずんば達せずと雖も近づくを得べきか、乞ふ君、聊か我ために意を安んぜよ、

倉橋君が歸朝の曉、川上君が志を成すの時、吉田君が學を卒へて校舎の門を去

るの時、あゝ君が最愛の一子に唱歌の聲を聴くの時、そもく、健次は何の得るところを以て再び其間に介在せん乎、今日の健次また其時の健次たらば断して諸君に見えざるべし、乞ふ一個の狂漢その終るところを知らずとせよ、他日の離合は此書を以て質となす、文は意を竭さず筆は心に随はずして徒らに涙あるのみ、

二月 念一

黒田 健拜

上田 君 力足下

その奥に別封の一書を封じ込みて、上田賢夫人の許へまゐらすと書せるもの、さらに披いて讀めば例の氣風を其まゝ例の走り書、わざと解し易く書き聯ねて聊か滑稽に類するところもあれど、また何とやら却つて一種の哀れを含みぬ、

これまでが萬事これまでの始末ゆゑ、今更ら何と申し上げ候ふても百舌の百轉りとやら、逆も人並のいふ事とは思召もあるまじく候へども、せめて親類の厄介物が厄介のかけ仕舞に懺悔いたせしものと御許の上、御察し下されたく候、さて多年の間いろく御世話を蒙り候中にも、わけて愚妻の死後この身の大病いたし方なく日夜に悩み居り候ところを御引取り下され候砌、申すも恐れ入り候へども新世帯の御内證まゝならぬ御手許にて親兄弟も及ばぬほどの御介抱にあづかり、あのまゝ一日も早く往生いたせば、また却つて御迷惑を省くべき奴めが、現世の業因いまだ盡きず、ひよこくと元の達者に生き返り候後は以前にまして御恩のかずく、たゞ仕合せの伯母御か姉様を持ちし氣にて、うかくと今日まで我まゝの勝手次第に打過ぎ候事、さてく罪深く冥加に餘りし身の果と後悔いたし候、

されどたゞ後悔いたし候のみにては、さらに何の甲斐なく、第一これまでの御恩を無に致し候やうの次第と存じ、今年今月今日こゝに身も心も改め更めて、申さば出直しの賣女に等しく、引眉毛の二度の勤めながら、おのれやれと一所懸命に相勵み申すべき覺悟に御坐候、あはれ白癡の一念にて何とか他日の境涯も相定まり候へば、其節また御目にかゝるべく候間、それまでのところは御見捨て置き下されたく候、

おのれが身も顧みず入らざる差出口との御叱りもあらんかと恐れ入り候へども、重ね重ね祈り上げ候は一家の御取廻し猶この上いよく御働きを要すべき事と存じ候間、偏に上田その人のため宜しく願ひ上げ候、元來あまり當世に立派過ぎたる男、却つて或は浮世の一端に不得手の次第もあるべきは勿論、そこは只管ら賢夫人の御内助を専一たのみ上げ候、あらく、かしこ、

讀み終つて上田は一種の感に打たれながら、はや生來の溜涙、いつしか兩眼に溢れぬ、これが倉橋か川上の口より筆よりならば鬼も角、平生が平生あれほどの恒なき奴が心より出でしかと思へば、いとゞ身に染む心地して、折しも座にある妻のお清を見返りつゝ、

「ねエおい、あの黒田から和女への手紙が添つてあるせ、面を見ると彼のとほり如何にも憎い奴だが、さて妙なもんで斯う言つてくると、また可愛さうな氣がしてね、はゝゝゝ、つまり乃公は欺されてるかも知らないが、さのみ根性まで腐つた奴とも思へないよ」

「おや、別に私への手紙が御坐いますの、薄氣味の悪い、坊にも斯んな縮緬を、何だか鬼に禮をいはれるやうな心持が致しますよ」

「さう和女、彼奴だつて、まさか鬼ぢやアないよ、しかし損な奴だ、腹になくとも持  
 ツたが病の口舌に毒があるから、どこへ往つても嫌はれてばかり居るよ、だがね、  
 彼奴は無遠慮で真正面の敵に刃向ふだけ、また人の蔭に立廻つて殊更らに佞辯を弄  
 するやうな事はない、たましく乃公に對つて川上や倉橋の事を罵倒するにしても本  
 人が本人さらに效のないのを承知の上の罵詈譎だから寧ろ一種の呵しみを含ん  
 で、つまり却つて罪のないところがあるよ」  
 「なるほど、そりやア然うですね、あれほどの傍若無人でも、さすが妾だけには少々  
 いくらか氣を兼ねて、ほゝゝゝ随分と良人、がらにもない、お世辭を使つてる時  
 が御坐いましたよ」  
 「だからさ、さう和女、鬼か蛇のやうに言つてやらなくつても宜い理由だ」  
 「おや、悪い事を申しました、御免遊ばせ」

「おいしく、さう和女のやうに言ふと、また義理にも彼奴を畜生と、あくまで悪く言  
 はなくツちやアならないが、まア和女、あんな奴でも、少しは和女に限つて遠慮し  
 たところを買つてやるさ、同じこつても川上の妻を評する時なンざアなか／＼思ひ  
 切つた酷い事を吐すぜ、しかし徹頭徹尾、和女だけには流石の横着漢も閉口して實  
 際に譽めて居たなア、よほど病氣の時の恩が骨身に染み込でるからだよ、凡そ耳  
 目の觸るゝところ苟も彼奴の罵倒を免れたのは實に和女ばかりだ、してみると和  
 女は眞實の賢夫人だぜ、はゝゝゝゝ」  
 「おやまア有難いこと、黒田さんに譽められて估券が上るくらゐなら良人、誰が心配  
 しますものか、世の中も樂なものですよ、ほゝゝゝ」  
 「いや、談話は變るが、世の中の苦樂云々といやア、あの川上も近々のうち夫婦で別  
 に家を持つといふこつた、つまり分家するといふんだが、しかも世俗の所謂分家



でない、まづ夫婦あらたに一世帯を始めて獨立自營の道を立てるといふ意味だ、しかし黒田のやうな人間と違つて、既に多年抱負の成算あつて今や著々その歩武を進めんとする曉だから、乃公なぞの世話になる筈もなからうが、また袖手觀望する理由にも行かない、由來こゝに乃公が川上に對する和女が妻女に對する、いづれにしても特別の恩人だからなア」

「いえ其事は過日も、ちよいと參つた時に大略、聞きましたから實は何とか及ばずながら、お力になりたいと思つて、しかし良人、どういふもんで、わざ／＼家を別になさるんでせう」

「そりやア和女、そこが所謂川上だよ、いつまであのまゝ、嗚アの袖屏風で舅の飯を喰つて居られるもんかね、どうせ別になる事は最初から分つた事だが、たゞ乃公の心配するなア外でない、つまり財産を貰つて分家するといふぢやアなし、一家人數

の都合上の分家するといふでなし、たゞ川上が心に思ふところあつてのこつたから、どうせ和女、今までとは違つて萬事、あらたに足らぬ勝の新世帯を張る理由さね、ついでには彼の妻女が、果して能く川上の良妻たるに恥ぢざるの素養ありや否やだ、川上が川上だから乃公の和女に於けるが如く過分の働きは入らないにしろ、せめて川上が赤裸で社會に對ふ初舞臺の境遇に伴ふだけの事、次第に依つては、いや次第の成行でない、當然、時の貧苦に屈せず艱難に撓まぬだけの勇氣が欲しいもんだ、いはゆる根が一人娘の深窓に育つて紳士的の家風に成長して來た嬢様だからなア、いくら豪い男でも門外の苦戦を慰するは只これ家に歸つて友白髪まで契りし妻あるのみだ、然るに和女その内助慰藉の大任あるべき嗚アが呵しく妙に變な膨れツ面をして在られちやア殆ど堪らないからねエ、語に曰く、腐れ阿魔の吼えツ面は債鬼百人に償すといふくららるだよ、は／＼／＼／＼」

「おや、良人にも似合はない事を仰しやるよ、ぢやア何ですか、今まで川上さんが濱町に在らしった時は兎も角、これからは妻とする事が出来ないといふ理由ですか」  
 「いや、さう取ツちやア不可ない、つまり川上と樂を共にするだけ苦もまた俱にする事が出来るかと、實ア老婆心よ」

「ですからさ、善い時は善いが、もし悪くなれば其まゝ薄情に泣いて遁け出すとでも仰しやるんでせう」

「こりやア驚いた、さう和女が怒らなくツても宜いでないか」

「だツて良人、あんまり酷い事を仰しやるからさ、しかし宜しう御坐います、それでは斯う致しますよ、もし川上さんに少しでも旦那らしくない事があツたら、妾は良人に當りますよ、また萬一もし御家内に女房らしくない事でもあツたら、遠慮なく良人が妾に當ツて、どうともなさい、つまり良人は川上さんの肩を持ち、妾は妾で

一方の肩どころか、身體中を持ち切りますから、こゝで倉橋さんが在らツしやれば行司をして戴くにねエ」

「おい、おい、それぢやア全然で和女と乃公が喧嘩でもするやうだ」

「ほゝゝゝ、しかし随分この事に就いては喧嘩も致しますよ、覺悟して御用心なさい」

い

「さア仕舞ツた、つまらない事で失敗ツたぞ、川上の妻と和女に内外相應じて攻められちやア、とても乃公は無効だ、どうか今の事は取消して貰ひたい、あゝ卿に依ツて我あるの上田力いよく閉口だ、謹んで失言を謝す、はゝゝゝ、いや笑ツちやア濟まない、ねエ、おい、全く取消だよ」

「それでは、お馴染み甲斐に半分だけ取消してあげます」

「半分たア、どういふ取消だ」

「つまり川上さんの方で夫婦喧嘩があれば、また此方でも負けずに夫婦喧嘩を始める理由ですよ」

「なるほど、いや名案だ、暗に兩々相警めて寧ろ家内安全を維持する方法だね、いはゆる明文に罪名を掲げて其罪を未然に禦ぐといふの理は、正にこれ立法者の精神に叶へりだ、とかく和女のいふ事は何でも平々凡々のうち却って一種の眞理を含んでるから感心だ」

「ほ、ほ、ほ、いつも良人ア自分が負けると、すぐ妾を脇道へ引き摺り込んで拜み倒す癖があるから叶ひませんよ、どうかすると黒田さんより却って油断のならないところだ、ありますからねエ」

「脇道へ引き摺り込んで拜み倒す、こりやアまた面白い秀句だ、しかし乃公は黒田より人の宜い覺悟だぜ」

「善いか悪いかは知りませんが、夫婦喧嘩は良人、キツと致しますよ」

「戦々兢兢として、致されざるを只これ勉むだ、は、は、は、は、」

## 其五

畫は丹青の痕よりも運筆の妙を尊び、人は成敗の結果よりも出處進退を重しとす、馬の尾に付く蠅は千里を行くと雖も、千里を行いて何の効かある、蝶は片々たりと雖も一寸の浮木をからずして能く百里の海を渡る、あゝ我は我たり何を苦しんでか人の脊に負はれて歩まん、世には萬金を作るの力ありて萬金の人に頼る大白癡あり、おのれが獨力に得べき地位も權家の女壻となつて生涯を内に憚り外に笑はるゝ勘定知らずもあり、わづか百年に足らざる人生、たゞ心に疚しからざる快を以て成敗の決を取るべきのみとは、近來かの上田に對うて川上三吉が語りしところ、逸を去つて勞を迎へな

がら別に一家をなすの愚も、またこゝにありと笑ひぬ、

養子に取ったか嫁に遣ったかは暫く儲置き、これより外にない一人娘の婿が今こゝに分家するといへば、親の身として舅の情として餘所に見るべき筈なく、まして富田正次の名は當時二三の銀行會社にも重役として人に知られし手前、場末の借家住居もさせられず、其日より鍋釜さけての貧乏世帯もさせられずと、一夜、夫婦を呼んで頻りに言葉を盡しつゝ、暫し待てとぞ押し止めぬ、

「ね、分つたか、つまり今いふ通りの理由で、固より男を見込んで添はした上は善惡とも其男の心に従ふべきが妻たるもの當然だ、今更ら自分の娘に浮世の苦勞さすのが可哀さで否應いふではない、また今そのまゝの丸裸で世の中へ突き出しては忽ち食ふに困る男と思つて案じるんでもないから、やはり従前の通り夫婦とも此家に

居つて別に何かする事があれば、立派に思ふ存分、するが宜いでないか、門前の表札も乃公の名と並べて川上三吉といふ四字を掲げてある以上、決して差支もない筈、さう急に別れて家を持つ必要も無からう、しかし是非とも別になるといふなら、それ相應の家屋も建て、兎も角も衣食に窮しないだけの財産を用意してやらねばならない、こりやア強ち夫婦に對するばかりでなく、凡そ人は分に應じた世間體といふ事もあるからなア、どうだね川上、第一は芳、和女が不可ない、たとひ川上が平生の氣性として、さういふにしる、よく和女が梶を取つて、なるべく良人に入らざる氣心を置かせず、また無用の苦勞させないやうにするのが當然だ、それに何のこつた、芝居か小説本でも見る氣になつて、手鍋さけるのを面白半分、心得るたア全體、怪しからん事だ、はゝゝゝことし二十四にもなつて何分、世間知らずの懷中ばかりに育つて來た女だから困るよ、かうして乃公の手許に居つてこそ、どうか斯う



また御厄介になるかも知れませんが、それは其時お叱りを蒙るとして置いて、どうか此度は是非お許容を願ひます、可愛い奴は旅に出せの諺、いはゞ浮世の瀬踏みに出る次第、しかし深淺も辨へず只その水面を望んで無益に飛び込むやうな事は断じて致しません心算で、なるほど、多少は浮いて流るゝ事も御坐いませうが、まづ溺れて水底に沈まないだけの覺悟は致して居ります、また同じ道を行くものが馬に鞭うって驅け出す利益と徒歩で走り出す不利益とは、よく心得て居りますが、その利害得失は暫く措いて、この三吉め、どうするか、お慰みに一度、はゝゝゝ、思ひ切つて、はふり出して見て下さいませんか、ついでには芳のこつてす、不肖ながら現在のおのれの連れ添ふ妻にまで纏纏は下けさせない決心ですが、さて始めての貧乏世帯で、しかも俄に思はぬ苦勞さすのも忍びませんから、これには何卒、月々三十圓づゝの小遣を戴きたう御坐います、實は、先刻の御言葉さへなくば、たとひ遣ると

仰しやつても、御辭退すべき筈のところを、この三吉、わざと却つてお願い申します」

「いや、よく分つた、分りました、もはや何事も言はない、よろしい、ぢやア芳の小遣として月々三十圓づつ送りませう、五十圓でも百圓でも更に差支ないが、それでは却つて折角の力腰を碎くのみか氣心を悪くするやうにも當るから、三十圓、なるほど、こりやア單に芳の化粧料といふやうなものだね」

「はゝゝゝ、ところが、この御亭主殿、その化粧料を日々の米や味噌に代へるかも知れませんが、しかし、なるべくは手も觸へないやうに心掛けます」

「はゝゝゝ、なアに化粧料は儲置き、本人の身體を煮て喰つても構はないよ、だがね、どこに居つて何をするとも月に三度、必ず一日と十五日と晦日だけは芳を訪問によこして貰ひたい、また乃公の方からも、をりくゝ出かけて遊びに行かぜ、さう急に

夫婦の顔が見えなくなつては實に心淋しいからなア」

「は、は、は、は、三度が五度でも六度でも、絶えず御機嫌を伺ひに差上げますのみか、どうか御氣分の向いた時は、いつでも、お越しを願ひますよ、つまり物數奇に無用の苦勞を望む理由でもなく、いは、夫婦が身のため世の中の味を舐めに出る意味ですから、たゞ他日、同じ此上の御恩を蒙るにしても、その御恩を無にしない下稽古で御坐います、は、は、は、は、しかし此邊が三吉の本音で、實ア慾張ツた次第で、今こそ少しは遠慮するやうにも見えませんが、まだく、他日、づうく、しい御迷惑をかけますよ、は、は、は、は、」

「あ、宜いとも、いくら掛けても宜いさ、は、は、は、は、とところで戲談は儲置いて、芳や、よほど和女、確乎しないと不可ないぜ、つまらない事を怒ツたり泣いたりするやうな事があつては濟まないぜ、萬事よく氣を付けてね、また優しくされると、される

ほど増長するのが女の癖だから、よく其邊を謹んで、いかに水入らずの夫婦差對ひとはいへ、あんまり和女べた／＼甘へ過ぎちやア見苦しいぞ、は、は、は、は、」

「いやですよ、お父様は、まだ妾を小兒のやうに思ツて在らツしやるから」

「いや御心配に及びません、もし甘へて無理でも言ツた時は、すぐ叩き出しますから、其節は何卒お入れなさらぬやうに願ひます」

「よし、決して入れない、何と言ツて來ても受け付けないから思ひ切ツて叩き出すが宜い、しかし叩き出す時は腰帶の間に迷子札を付けてやツてくれよ、うろ／＼市中に狼狽いて居れば兎も角、まだ始末は宜いが、もし方角を失ツて變なところへでも飛び出すと面倒だからねエ、は、は、は、は、」

「よろしう御坐います、お二人で何とでも好きな事を仰しやい、どうせ妾は、こんな不束な女で御坐いますから、いッそ御注文通り、何も分らない小兒になツて仕舞ッ

て、さんざ思ひ切り御迷惑をかけてあげませうねエ、ほゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

## 其六

倉橋が多年の素養と宿志とを抱いて海外に羽翼を伸してより凡そ二月目、黒田が久しく枯れ果てし懐中へ三千五百圓を捻ぢ込んで二度目の社會に飛び出してより一月目、川上また濱町の家を出でて妻の芳子もろとも何處に身を置くかと思へば、本所の奥の片邊なる柳島へ引移りぬ、

文筆をもて閑日月を送るべき身でなく、人事を厭うて門前の雀羅を誇るべき身でなく、月々一定の収入より打算せし一家經濟のためにもあらず、日々いづれかへ通勤の便利あつて引移りしたためにもあらず、失敗また失敗の果に落ち込んだでもなく、車馬の音響に堪へざる病人の出養生でもなく、いざやこれより新に社會へ出でて何等か事をな

さんとする男、しかも三年こゝに飛ばす蛩かすして久しく養うたる心の一物を當世に施さんとする男が、土地もあるべきに本所の末の柳島とは儲も訝し、たま〜人氣の立續くは春一時の龜井戸の露の間に溢るゝ秋の萩寺、それさへ世事以外の醉漢と社會無用の閑人を見るのみ、夏は徒らに藪蚊の巢となりて軒端にも出られず、冬は空しく寒狐の聲を聴いて更け行く小夜の寢覺に枕を欹つべきところ、そも〜いかなる黄金窟かある、そも〜いかなる思想界かある、川上三吉たゞ獨り微笑を含んで首肯きぬ、

吾妻の森も遠からず浮洲の森も遠からず、梅屋敷に近く萩寺に近く、柳島の妙見堂と小川の流水を隔て、閑靜なる生垣に松の葉越しの軒深しといへば、いかにも風流めいて月雪花の眺めに飽かぬ心地すれど、その實は更に何の景色も雅趣もなき本所の果の



場末にて、固より紳士の別荘になるべき筈なく氣樂者の隠居所にもならず、往來は淋しくして小賣の店も出されず、田も畑も隔りて百姓の住居に適せず、日々駈け廻る世間師の巢には出入の不便あり、夜のみ通ふ戀の埒には一種の恐れあり、さりとして僅少の月給取は時間と車賃に追ひ付されて片時も堪らず、其日かせぎの貧乏人は猶更ら以て世帯を張り切れぬといふところより、家も庭も相應に整うて一構への地面は凡そ百五十坪もありながら、十圓の貸家札そのまゝ見返る人もなくて久しく門前に横たはりしを、何と申うてか川上三吉こゝに手を拍つて住み込みぬ、人知れず多年の身も心も養うたる川上三吉が、あらたに出陣の足場と定むべきところ、いかなる家かと思ひの外、いはゞ東京の二字に殆ど縁の飛び放れたる本所の奥の片邊この柳島と聞いて岳父の富田政次も思はず眉を擧め、妻の芳子は猶更ら呆れたる體、流石の上田夫婦さへ小首を傾けて腕を組みぬ、

されど何事にも立つて騒がぬ持重の本人が、わざ／＼一週間を費して探し出せしからは仔細なくて叶はぬ筈、まして平生より事の成就するまでは疑はれても怪まれても一切さらに無用の辯解せぬ男が、當分こゝに取極めたとの一言、もはや動くべき筈なければ、いづれも不審ながら取急いで俄に引移りぬ、せめて市中の便利よき場所ならば、また引移つて後の不自由次第に物も運べど、かう懸け隔て、は用意の上にも用意すべしとて、厨の道具は固より座右を飾るべき骨董書畫の類まで贈らんとせし岳父の芳志も、川上これを制して火災盜難の面倒ありと笑ひ、わけて妻の芳子は懷中生育の今こゝに始めての新世帯、嬉しいやら心配やら呵しいやら、海山越えての遠國へでも旅立つが如く、あるかぎりの衣裳手道具を掻き集めて持ち行かんとせしを、川上また睨みつけながら、いち／＼叩き賣るぞと吐り飛ばして纒に當分の調度だけを運ばしめ、自己は外出の和洋禮服おの／＼一着と朝夕の常着三四

枚の外は、悉く濱町に取残して眼もくれず、やう／＼持ち込みしは支那カバン大小三、個と多少の書籍文具と夜具薄團に鍋釜火鉢の世帯道具とを積み載せたる荷車一挺のみ、

しかも濱町より車夫書生下女の類が當分のうち交る／＼に寝泊りせんとせしが、また一切これを禁じて轉宅の其日さへ一人も手傳はせず、唯かの上田力が二十貫目の大兵を軽く持ち込んで繩襪を十字に綾どりつゝ、荷物を曳き來りし人足四人と共に萬事をとりかたづ取り片付けぬ、

いざや今夜より此借屋住居に夫婦たゞ二人と、かねてより傭ひ置きし飯炊婆と主従以上三人の一家、世帯は淋しく薄くとも氣心は楽しく厚かるべき筈、されば川上がため以て大に前途を祝せざるべからず、細君は始めて浮世の浪に乗り出す一葉の舟心地、まづその臍固めなかるべからずとて上田が例の天真爛漫に一升酒を打喰うて山の如き五

體を跳ね飛ばしながら、めでたい／＼と坐敷の中央に滅多無性の無茶踊を演ぜしが、あまりの嬉しさと其場の興に乗じて我を忘れつゝ、久しく空屋のまゝに朽ちかけたる縁先を大力の高足に踏み碎くや否、沓脱石に向脛を摺り剥けども更に屈せず、またもや這ひ上ツて踊り出せし勢ひに川上夫婦も傭婆も思はず手を拍ツて笑ふ聲、なほさら目出たいとて先生いよく踊り狂ひし體は流石に上田力、妻子は持つても汐入村の昔どこやらに面影を残しぬ、

苦學難行の巢を俱にせし刎頸の知己いづれはあれど、十餘年來の今日まで陰に陽に身も心も去らず去られずして影の形に従ふが如く、いはゞ我ための師とも兄とも頼みし川上三吉が出でて新に一家を構へしのみか、いざやこれより多年の養ふところを社會の風雨に試みんとするがため、まづこゝに足場を定めし今日今夜の快あゝ堪らぬと

狂喜のあまりに裸踊りを演じて床板を踏み抜き向脛を摺り剥きながら、上田先生さらに屈せず驚かず、一升酒の勢ひに猶も踊つたまゝ飛び出せしは夜の十時過ぎ、兩國の我家に歸らんとて本所の割下水まで歩みしが、自己たゞ一人で大茶碗の瀧呑みに息もせざりし冷酒の酔心地、しかも久しぶりの甘露いよく其日の空腹に染み渡つて今や三四升の上にも立越えたる醉眼朦朧、たゞ陶然として風に乗るが如く雲を踏むが如く、思へば昔日の我が蓮の葉を戴いてステッキを振り廻せし意氣軒昂の時に相似たりと例の大兵躡蹠として自然に起る吟聲朗々、幾度か途上の巡查に咎められて其注意を謝し、しばし脚下の小石に躓いて舌鼓を鳴らせしが、果は横町より不意に飛び出したる杉犬の聲に驚かされ、畜生々々と叫びながら思はず片足踏み外せば、いかで堪らん二十貫目の大男、ずる／＼と其まゝ音もなく泥溝の中へ迂り落ちぬ、されど上田は上田どこまでも上田力、うき世の才子めいたる業には何の得手もなければ

ど、かゝる場合には正に是れ宛然たる一個の古壯士、きやつとも叫ばず、ちつとも驚かず、腰より下を泥に食まれながら無言のまゝに息を吹き両手を伸ばして這ひ上らんとすれど、たゞさへ人並すぐれし五體、ましてや闇の夜の星明りに酔眼いつしか方角を失うて、しかも喰ひ酔つたる我身の重量に自由を缺きつゝ、動けば動くほど次第に深泥へ落ち込む體、されど先生なほいまだ聲も立てず、果は胸より面より脳天まで眞ツ黒に泥を跳ね上げて病める牛の如く頻りに藻掻きぬ、をりしも背後に空車を曳かせて歩み來りし一人の男、ふと割下水の中に蠢く物あるを見て歩を停めながら、車夫を呼んで提灯の火に照らせば正に泥まぶれの生きた人間一疋、さては酔漢か病人かとステッキを伸ばして差出しながら、  
「はゝゝゝゝこいつア呵しい、まるで黒ン奴の啞が戸惑ひしたやうだぜ、おい、おい／＼どうした、意氣地のない奴ぢやアないか、おいこら、このステッキに確固

と取ッ付け、引き上げてやるから、**確固と搦まれ**、もし途中で放すと顛倒ッて今度目は面が泥底に埋まるぞ」

いへば黒ン奴そのまゝの探り手にステツキを搦みながら、

「さてよ、どうも貴様の聲は聞き覚えがあるぞ、もし黒田の健ぢやアないか」

「やア上田か」

「この野郎、上田かも知れないもんだ、さア今、何と吐した、黒ン奴の啞が戸惑ひしたとは、けしからん事をいふ奴だ、全體まア貴様アこの夜中、そもく何のために此邊を彷徨いてるんだ、白狀しろ、返答の次第に依ッては畜生、乃公は上げて貰はなくツても宜い、貴様を引き摺り込むぞ」

「おい上田、めづらしく酔ッたな、しかし別段どこも怪我は無いか、さア馬鹿な事いはずに早く上れよ」

「いや、さう軽々しく上ると貴様の爲にならない、第一また貴様ア乃公の家を出てから一月の餘にもなるが、例に依ッて例の如く何處に居るか其後さらに音信不通たア濟まない奴だ、酒に酔ッても泥に落ち込んでも乃公の言ふ事に間違ひはあるまい、ない筈だ、所謂これ泥酔でも何でもないぞ、さア引き摺り込んでやるから覺悟しろ」

元來が大力の上田、しかも斯くまで酔うては猶更の怪力、引き摺り込むといへば磐石をも引き摺り込むべき男と流石の黒田も思はずステツキを放して飛び退きながら、俄に車夫を見返りて聲まで急しく、

「おい手を貸してくれ、こりやア乃公の友達だ、よほど喰ひ酔ッてるからステツキぢやア無効だ、しかも此奴けしからん大兵で力のある男だから、迷惑だが無價は使はない、泥中へ這入ッて背後から抱き上げてくれ、乃公は上で兩手を搦んで引き揚げ

るから、しかし宜いところへ來合はしたもんだ、もし此まゝ、おい上田、まゝ待てよ今、今すぐに揚げるぞ、全體まア君にも似合はないこつた、いくら酔ったからつて泥溝の中へ落ち込むなざア、あんまり滑稽過ぎた藝だぜ、はゝゝゝ」

「えゝッ誰が滑稽で泥溝の中へ落ちるもンか、戲談は儲置いて早く引き揚げる、なアに這入らなくつても宜い、そのステツキの根本を二人で一所懸命に持つて居ろ、手がゝりさへありやア乃公は一人で大丈夫だ」

黒田と車夫の二人が總身の力を込めてステツキを差出せば、泥龜の如く満身まツ黒になつて這ひ上つたる上田先生、提灯の火に眼と齒ばかり白く光らせながら、なほ吹き出す酒氣紛々、よろゝとして脚下いまだ確固ならず、

「おい黒田、その俵は貴様に乗つて來たのか、ぢやア乃公を乗せて館まで送らせろ、ついでに後押しでもして來てね、一は細君の手前うまく何とか申譯をしろ乃公がた

め、この體裁ぢやア少々面倒だ、また一は其後の仔細に就いて貴様に聞く事もあり言ふ事もあるから、やア下駄が無い、しかし、わざゝゝ這入つて取るには及ばないぞ、さんざ履き古した山桐臺の日和下駄一足、二十七錢で購うて以來こゝに四個月だ、もはや惜しむに足らないが、家に歸つて最愛の一子を明朝の枕頭に慰むべきお土産が紛失したよ、川上の妻が美濃紙二枚に包んでくれた大々的の羊羹五切、おい黒田どツか歸途に菓子屋があるだらう、なア貴様よく氣を付けて見落すまいぜ、宜いか、嚴命まづ大略かくの如しだ、さア行かう」

そもゝゝ過日の一書を投じてより少くとも三年は逢はざる覺悟の折も折柄、かゝる上田の體に出喰はして流石の黒田も聊か案外の閉口、満面を皺めて苦笑ひしながら、車夫に腰を押させ自己は肩先を掴んで車へ助けあぐれば、上田先生いよゝゝ得意の顔色化物の如し、

「おい車夫、蒲團も毛布も汚して氣の毒だが、いくらでも損害賠償は其男から取れよ、決して遠慮するな、全體、其奴は乃公の家來で久しく世話をしてやツて居たが、一月ほど以前、ふいと飛び出してね、さらに行方不明のところ思ひも寄らぬ今夜、かういふ理由で出喰はすたア不思議ぢやアないか、悪い事は出来ないもんだな、勿論、乃公の家を出奔の際、別段これといふ紛失物も無かつたがね」

「おい、おい〜上田、くだらない事を饒舌らずに黙ツて、黙ツた黙ツた、おとなしく乗ツて居ないと今度は道普請したばかりの砂利の上だぞ、無事ぢやア濟まないぜ」

「や、心得た、ところで黒田、貴様もし途中から遁け出すと聞かんぞ」

「大丈夫、安心して乗ツてるが宜い、おい〜その身體で君、さう振り向いちやア車夫が困るよ、は〜、さう〜さう〜どうも酒といふもなア不思議だな、君の如き人物をして斯

の體に至らしむるからなア、しかし何處で飲んだ」

「川上、知らずや今日は川上の轉宅日だぞ」

「む〜さうか面白い、いよく彼奴も我みづから我尻を鞭ツて出かけたな、全體どこへ家を持ツた」

「いはない、貴様、自分の居處も知らないで、人の家を聞く奴があるか」

「は〜、は〜なるほど、ぢやア聞かないから、まア靜に乗ツて居ろよ、あぶないぜ」

「や、黒田、あの辻の左ッ角に瓦斯燈の出てるなア菓子屋で無いか」

「こりやア驚いた、いかにも菓子屋らしい、それほど酔ツて居ながら、よく見付けたもんだな」

「知れた事いへ、子のために輝く父の眼は酔ツた上田と別人だ、さアお土産の羊羹を買へ、しかし家で乃公を待ツてるのは強ち子ばかりで無いぞ、その邊を如才なく考

へて買へよ、これまた貴様のためだ、あゝ汐入村以來こゝに十有餘年、いつもく  
厄介な奴だわい」

そろ／＼と車を曳かせて、やう／＼兩國の家に歸るや否、黒田まづ立寄ツて門の戸を  
叩けば、妻のお清まだ寢もやらで待ち受けし聲もろとも、引き開けし戸口に顔さし込  
んで、

「やア細君、黒田です、實ア今夜、途中でね、ふと上田に出逢ツたは宜いが、儲どう  
したもんか、大變に酔ッぱらツて、あの本所の割下水へ落ち込んで居たといふ騒動  
さ、やツとの事で引き揚げてね、しかし唐突に驚かしちやア濟まないから、これだ  
けの前觸をして置きます、はゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
さ、どうか小言は後の事まづ急に湯でも沸かして、洗ツてやツて下さい、自分が兄弟  
同様な友達だから言ふでもないが、随分これ厄介な御亭主殿で實に毎々お察し申し

ます、さア上田、あらまし前口上は濟んだぞ、さのみ逆鱗もないやうだ、早く這入  
れ、おい車夫よく氣を付けてくれよ、手を取るんだ手を、細君この通りの黒ン奴で  
す、はゝゝ  
たツて無効だ、潔く謝ツて仕舞へ」

車夫に手を取られて黒田の背後に山の如き身を縮めながら、五尺八寸まツ黒の泥人形、  
しかも熟柿に等しき酒氣を吐いて面のみ差出しぬ、

「いやはや、トンでもない失策を、やらかしたよ、しかし人の一心は豪いもんだね、  
泥溝の中へ横ツ倒しに落ち込んで、これこの通り和女の坊の土産だけは差上げて  
居ツたと見えて無事だぜ、はゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

お清は無言のまゝ良人を引き入れて入口の庭に立たせ、車夫への賃錢一切は黒田に任  
して其身は臺所に断け込みつゝ、瓶の水を汲んで俄に釜の下を焚き付けながら、そろ

そろと障子越しの矢を放ちかけぬ、

「まア良人、いくら酔って居たつて、小兒ではあるまいし盲目でなし、何といふこつてす、お、臭い、お酒と泥の悪臭が此處まで通つて来て鼻持がなりませんよ、もしこれが白晝だつたら全體どうでせう、宜い加減になさいよ馬鹿々々しい、せめて小ぢんまりとした生優しい身體でもある事か、たゞさへ圖なしに世間普通を外れた山のやうな大男が、ほ、ほ、ほ、まるで物の比例様がありますまいよ、いッそ今のうち坊を起して一目みせて置きませうか後日のため、しかし驚いて蟲でも出すと困りますからねエ、坊どころか、妾だつて黒田さんの前觸が無けりやア驚愕して其場に氣絶したか知れませんよ、化物だつて良人、も少し體裁が宜くツて見よいでせうよ、ほ、ほ、ほ、おや、急に車の駈け出した音がしますが、黒田さんは其處に在らツしやいますか」

「やア黒田の奴め遁け出したぞ、畜生まだ言ふ事が」

「あれ、およしなさい、そんな様で追ツかけられますか」

「だつて彼奴」

「なアに仕方なしに良人を送り込んだのですよ、過日の手紙で分ツてるぢやありませんか、現在あの時に自分が讀んで妾へ聞かせながら、三年とか五年とか顔を見せなといふ筈でせうがね、當然ですよ、まだ途中で良人を扶けて此處まで送り届けたのは以前の黒田さんと少々違つてるからですよ、それより今日、川上さんが御轉宅なすつた家の様子でも話して下さい、どうして在らツしやいました奥さんは」

「しかしね、おい、酒が醒めて泥が身に染み込む故か、頻りに寒くなつて來たぜ」

「まだ湯は沸きませんよ」

「さうかい、仕様が無いねエ、いや自業自得だ、耐忍々々」



「忘れないやうに良人、よく覚えて在らッしやいよ」

## 其七

人間たゞ喰うて着て寝て起きて自己あるだけの定命を終るのみならば、世の中の萬事一切これほど易き業は無けれど、儲そればかりでは濟まぬ筈の生涯、おもへば世の中の萬事一切またこれほど難き業はなし、されど難しといふも易しといふも元來の空文字、その易きを求むるものは易き道すら取るに難く、その難きを求むるものは難き道いよく難く、さりとして難きに怖れて逐はず易きに馴れて進まざれば、只これ生きて物喰ふのみの動物一疋、さらに何の甲斐も無し、

あはれ糞はくば生きて蠢くのみの外、別に何等かの甲斐なかるべからずと、心の活動

に依つて人生さまぐの千態萬狀、まゝならぬ浮世を自由にせんとの競争場裡、しかも行く道は多くして却つて迷ひ易く、取る業は多くして却つて誤り易く、迷ひ易く誤り易くして始めて面白き世の中に、そもぐどの道を傳うて如何なる業を取らんとするか、

汐入村の昔は日夜の空腹を抱へて苦學十年の難行を経しかど、たゞ文字上の人となりて學理の研究に生を終るがためならず、たゞ官海の人となりて租税の一端に世を送るがためならず、また一度は都門の風塵を去つて故山の奥に猪猿を相手の獵夫にならんとせしが、もとより人生の慘澹を恐れて遁け出せしにはあらず富貴功名を捨て、隠れしにはあらず、されば其後また山を出でて所謂當世紳士の戀壻となりつゝ久しく其家に衣食せしかど、空しく富の寄生蟲と爲つて其身の安逸を求めしにはあらず、徒らに人の尻舞を演じて其後釜を覗ひしにはあらず、さりとして闇雲飛び乗りの性でなく血

氣狂奔の徒でなく、物に小刀細工なく事に放棄調子なく、一切ほつとして不言不知の如くなれど大體の骨子根本には常に人知れぬ執着心を備へたる此男が、そもく柳島の隠居めいたる草屋の軒より金色の當世に對うて何をか仕出來さんとする、たゞ門前に張り付けし川上三吉といふ五號活字の名刺一枚、白く小さく松の小影に旭を受けて何の仔細らしき體もなし、

わづか月に十圓の家賃ながら、浮世の有財餓鬼と無財餓鬼とが住んで用なき土地なれば、七十餘坪の庭に石も木もありて大小五室の一軒家、しかも始めての新世帯ながら兩國の橋を渡れば更に何の不自由もない生家を控へて、戀塔の良人と共に耳も目も遠い傭婆たゞ一人の手前、結句これまでの身とは打ッて變りし世話女房の嬉しさ樂しさ、まして一人娘の懷中生育といはるゝが口惜しさに、せずと濟むべき臺所に彷徨いて

り願け、用なき時も襷がけの前垂姿いそくとして、何をするやら頻りに立働く妻の芳子を見返りつゝ、流石の川上三吉ふツと思はず吹き出せば、笑はるゝ心のうち猶更ら嬉しき風情、さて何の罪もなし、

「おいゝ和女、先刻から何をしてるんだよ、座敷と臺所の間を頻りに往ツたり來たりして如何にも忙がしさうだが、別段これといふ用もないぢやアないか、はゝゝゝはゝゝゝ」

「あれ良人アまた何故、笑ッてばかり在らツしやるの、さう妾のする事が呵しう御坐いますか、どうせ最初のうちは馴れませんから一度で濟む事も、二度や三度は良人かゝりますよ、まア黙ッて見て在らツしやい」

「いや此頃は日が長いから、たとひ三度が四度でも宜いがね、只うろく家の中を彷徨いてばかり居たツて仕様がなないぜ、もし運動なら庭の方が宜からう、第一あんま

り和女が働き過ぎちやア却ッて婆さんが閉口だ、あと始末が大變だからねエ、は、は、は、

「おや、妾が用をすると萬事さう邪魔になりますの」

「なアに大して邪魔にもなるまいがね、少々は迷惑になるらしいよ、今朝も和女、臺所で何か失策をしたと見えて、さんざ婆さんに笑はれて居たぢやアないか」

「ほ、ほ、ほ、あれは良人、今朝お味噌を摺る時、たゞ妾の手つきが呵しいと言ッて、それで二人が笑ッて居たのですよ、いくら妾だッて、さう失策ばかり」

「は、は、は、一事が萬事だから、臺所で笑ひ聲さへすりやア必ず和女が、は、は、は、何か遣り損ッたもンと思ッて居たよ」

「あら酷い事」

「しかし和女、たゞ味噌を摺るぐらゐは何でもないやうだが、さて實際となれば、

なかく、むづかしからう、わけて味噌摺は厨に於ける古來の難事だ、うまく味噌さへ摺りやア其日から世帯一切を任しても宜いといふほどの呼吸と調子があるんだ、そも、力をを用ひ過ぎては播槌が廻らず、また力が足らねば味噌が摺れず、さりとして下手に呼吸と調子が付けば忽ち播鉢が躍り上ッて遁け出すといふ難中の難物だ、あの識者は此味噌摺業を以て凡そ人の世に處すべき秘決とし、また馬術師は此味噌摺を以て悍馬を御するの秘法とするくらゐだ、つまり馬でいへば強く手綱を絞ッてならず弱く放してならず鞍と鐙に固くてならず寛くてならず、只これ自然に得たる心を以て乗らすんば、いはゆる鞍上に人なく鞍下に馬なく人馬これ一體といふ妙境に達しないのだ、は、は、は、乃公の手前味噌も先づ此邊として置いて、兎も角も世帯向の事はね、さう急に半月や一月で覺えられるもンぢやアなし、また前途これから長い月日だからね、おひくと次第に馴れた方が宜いよ」

「しかし妾は何だか嬉しくって、面白くって堪りませんわ、なぜ今まで、あんなに惘然して居たかと思ひますよ、一日も早く覺えたい氣がしてなりませんもの、ほ、ほ、ほ」

「や、どうも罪のない事をいふぜ、なるほど今は萬事が物珍らしいから、面白をかしい氣もするだらうが、は、は、は、これもよくこれが浮世といふ不思議な怪物に近づく一の木戸口だ、うかくすれば猶更、しなくって是非に一度は和女、飛んでもない目に逢って泣き出さず、しかも痛いとか口惜しいとか聲でも出して泣けるやうな生優しい事なら和女、まだ辛棒も堪忍も出来るだらうが、いふに言はれぬ苦しさ切なさで泣くに泣かれぬ辛さ悲しさだから、なかく酷いよ、骨身に徹へるよ、いくら其時になつて後悔しても無効だ、いッそ今のうち、あきらめて遁け出した方が少しやア見宜いだらうぜ、は、は、は、降り續いた五月雨のやうに毎日々々、べそ

べそと濕ッほく遣られちやア實際いかな男も陰に閉ぢられて陽に開く方角を失つて仕舞ふからねエ」

「あら、また、お父様でも良人でも二言目には、すぐ妾を小兒のやうに仰しやるが、いくら小兒だつて一所懸命になれば、油斷が出来ませんよ」

「いや、決して和女を小兒視する理由ぢやアない、つまり餘計な御苦勞をおかけ申して千萬お氣の毒に存じますからさ」

「ほ、ほ、ほ、それこそ良人、入らざる餘計な御心配、どうか御無用に願ひます、それとも行末お仕込甲斐のない不束なものと思召せば、もはや致方も御坐いませんから」

「致し方がないから、どうしろといふんだ」

「どうとも御勝手次第に遊ばせ」

「なるほど今、和女が自慢した通りだ、うツかり舐めてかゝると、唐突に油断のならない度胸の据った返答をするよ、しかし其度胸の据ったところを幸ひ、あらためて聞くが、全體、和女はね、なぜ乃公のやうな男を聲に持ったのだえ、と斯ういへば戲談かと思ふだらうが、決して戲談でない、およそ物には何等かの希望なくして應ずべき筈なく何等かの要求なくして合すべき筈がない、かの犬猫すら互に毛嫌ひといふ事があるくらゐだから、まして意志と感情とで持った人間が二度と再び取返しのない生涯たゞ一度の選擇を、まさか夢うつゝではすまい、ねエおい、どうだ、どういふ理由で斯うなつたのか、委しくは入らない、ちよいと聞かしてくれ」

「いやですよ良人、今更そんな事を、いくら傍に聞く人が居なくつても、だから妾は、いつも馬鹿にされて居るかと思つて、をりくは口惜しくなりますの」

「いや、こりやア和女、傍に誰が居たつて恥づることではないよ、しかし、まア居ない

方が宜いとして、どうだ、つまり富田正次の一人娘といへば、随分おもふまゝの婿も養子も来る筈の和女が、まして其ころは汐入村に喰ふや喰はずの川上三吉、わざわざ布子一點寒晒しの乃公を好きこのんで、はゝゝゝすき好みもしまいが、どこに何の見るところあつて迎へたのだ、その返答に依つて現在どう斯うするといふ理由も仔細も無いがね、さて今までとは違つて、かく別に一家を持つた以上、もし乃公が迎へられたところと和女が迎へたところと其間に萬一、甚だしい黒白の相違があつちやア、これから永久の行末に就いて互のため宜しくないから聞くのさ、勿論、和女の鑑定が違つてでも居れば、あらためて乃公が言ひ聞かすからだ、夫婦の間さ

らに遠慮なく打明けて見ろ」

「おや、全く戲談かと思つて居ましたに、大變、何だか急に、むつかしくなりました事、そりやア良人、縁といふもので御坐いませうと、かう申したばかりでは濟みま

センの、どうか此邊で」

「いや、濟む濟まないといふやうな面倒な理由でない、まづ早い談話が、取るに足らない變な面でも人の氣は蓼喰ふ蟲の世諺で、乃公の容貌が珍に茶が、ツツて面白いとか、また世間普通の標準より横に曲ツた乃公の氣質が和女一人、どういふもんか憎くないやうに感じたとか、いづれ何か其間に其時の目的があるだらう」

「ほ、ほ、ほ、さう良人、仰しやれば仰しやるほど、いよく、むつかしくなツて困りますよ、しかしね、實は、あの時、たゞ良人が偉い方だと思ツて」

「たゞ偉い方、そりやア和女、あんまり漠とした鑑定だ、全體どういふ工合に偉い男と見た」

「かねぐく上田さんからも聞いて居りますし、また父が始めてお目にか、ツた時、あとで大變に響めて居りましたし、そして妾もね、ほ、ほ、ほ、何だか自然に響めたく

なツたからですよ、もう此上は何と仰しやツても返答いたしませんよ」

「は、は、は、ぢやア結局、有形よりも寧ろ無形の點が多少、御意に叶ツた理由だ、よし、それで少しは安心したが、もしまた乃公の男振ばかりに惚れたもんなら、段々と年を取るに従ひ白髪も生えるし皺も出来るし、こいつア困ツたわいと實は心配して居たのよ」

「あれ、さんざ妾に戲談をいふなと仰しやツてさ、すぐ御自分が」

「いや、戲談は戲談として、時に和女、この乃公を假にも偉い男と思ツて添ツた以上は、どこまでも飽くまでも偉い良人と思ひ通してくれよ、いかなる事があツても、たとひ人に頭上を踏まれるやうな事があツても、よしや其日の衣食に迫る貧苦に陥つても、やはり乃公を偉いもんと思ツて居てくれよ、なるほど馬鹿は馬鹿に相違なく黒いものを白く思へたア頗る事實の顛倒した無理な注文だが、さて味噌でも糞で

も自分の物となりやア仕方がない、まして夫婦の間には切るに切られぬ人力の外ともいふべき愛情の執着があるから、その氣の持ちやうと心の考へやうでは、まさか無縁の他人の黑白智愚に對するほどでも無からうから、是非とも乃公を偉いものに仕通してくれ、よ、門外の人事一切は殘忍酷薄なる敵ばかりで、敵にあらざるもの多くは虚禮と偽善を以て満たされたる危い巷で、強ち其敵を恐るゝでは無いが、さて大に進まんとすれば必ず大なる敵を引き受け、これに對うて勝敗を決する苦心慘澹なかく、一朝一夕の働きでは無効だ、ところで眞に我味方となり我援助となつて絶えず我を慰むるもの何處に居るかといへば、おい、天下たゞ和女一人だ、その和女さへ乃公を偉いものとして何事も隔心なく疑はず、快けに楽しく嬉しげに優しく朝夕を册いてくれさへすりやア、この戦士よしや時に敗れて多少の手疵は負つても大丈夫だ、いはゆる我ために生命の露は和女だ、和女は乃公がため病人に於ける名

藥だ、妻なる一語は殆ど良人に對する萬能力を備へて居るから、たゞ乃公を何處までも偉いものに拜み立て、煽り立ててくれ、實ア欺しぬいてくれても宜い理由だ、その代り乃公は和女に對して更に一點の注文もしない、かの世間に於ける良人の如く、貞淑たれとも温順たれとも何とも言はない、まづ一例をあぐれば、たとひ今後どれほど氣に入つた着物を拵へてやつても、いかほど心に叶つた帯を買つてやつても、決して乃公がしてくれたいと思はなくつて宜いよ、かりにも有難いと思ふに當らない、さらに恩に思ふべからずだ、つまり道で拾つたもんか自然に湧いて出たものと思ふべしだ、もし良人たる乃公が働きでして貰つたなどと間違つた料簡を起しちやアならんぜ、着類調度に限らず生涯の衣食住一切これ良人の恩といふ事を悉く忘れて仕舞へ、うかく、狼狽へて思ひ出すと和女、きかないぞ、宜いか、分つたか、  
「ほゝゝゝ、妾には少しも分りませんよ、まるで分らない事を仰しやいますもの、

なるほど妻として良人を偉い方と思ひ、生涯これを立通すのは當然ですから、よく分つて居りますが、衣食住一切これを良人の恩と思ふな、どんな結構な着類調度を買つて戴いても、決して有難いと思ふな、拾つたか湧いて出たものやうに思へとは良人、ほ、ほ、ほ、まるで良人」

「いや、たとひ塵一本でも良人の賜ものと思つて有難く心得ろといふのが世間一般通常のこつた、しかし乃公は聊か違つた考案を持つて居るから、是非とも、今言つた通りの氣で居れ、つまり斯うだよ、よく聞けよ、もしこゝに乃公が五十圓の帯を和女に買つてやるとする、ところで餘所の妻君が百圓の帯を持つて居るとする、さアどうだ、誰が眼で見ても五十圓より百圓の帯の方が立派だらう、そして雙方ともに等しくこれ良人たるものが妻に買ひ與へた同じ帯だ、ね、すると和女の良人より餘所の良人が偉く見える筈だ、また乃公か和女を人力車に乗せて出せば餘所の良人は其

妻を馬車に乗せて通る、どうだ人車より馬車に乗せて出す良人の方が何としても偉く見える筈だ、いえ妾は身分相應といふ事を存じて居りますといふだらうが、いけな、そりやア世間の手前か義理人情的の申譯か乃至また負け惜しみか、さて眞實さう思つて居るにしても何等が心のうちに一種の強ひて忍ぶところがなくて叶はないこつた、いやしくも人として白いものと黒いもの、差別を知る以上は耳目の觸るところ必ず精粗美醜に依つて自然的比較的の感情が起るべき理由だ、いはゆる足るを知るの言で身分相應を守るといふ事は、なるほど人間の美德に相違ない、相違ないが儲、古今ともに美だの徳だのといふ高尚の立理は往々いふに易くして行ふに頗る難いこつた、つまり仁義の類で、一の理想に置いて自己これに近づかんとするは至極結構だが、乃公はね、そんな難い事、むづかしい事をしてくれたア和女に強ひない、足るを知り分を守るといへば即ち我の彼に及ばざるを斷念する意味で、早



くいへば逆も叶はないから心で降参する結果だ、降参するにやア幾何か残念とか口  
 惜しいとかいふ事がある、ね、だから乃公は和女に對して一切さらに分を守ってくれ  
 とも及ばざる事を断念しろとも降参しろとも言はない、その代りに衣食住一切また  
 良人の賜物と思はないやうにしろ、こりやア我家の良人が働いてしてくれたと思へ  
 ば餘所の良人が働いてした物と見較べて、そら負けると腹が立つだらう、従うて乃  
 公を偉いものと思へなくなる理由だ、ね、ところを不意に拾ったとか湧いて出たと  
 か思やア和女、腹も立たず氣も揉めず、また世間の亭主野郎に引き較べて乃公の價  
 値にも關しない、拾った物は無價だ、無價で物を得て不足のあるべき筈はなし、こ  
 れ天より和女に授った福分だ、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、  
 まで偉いものと假定して、實は欺し込んで、おだて込んでね、つまり利益のない神  
 様か佛様が家に傳はったと思つてさ、仕方がないから拜んでやるさ、ね、そして自

分の衣食住一切は運が善くつて不意に降つて湧いたものと思やア、凡そ世の中に不  
 足はあるまい、百圓の金を乞うて十圓の金を得た時は、一圓の現金に對して有難か  
 らうが百圓の希望に對しては聊か面白くない、しかし一圓の金を不意に拾やア随分  
 まうけ物だ、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、  
 衣食に窮する事があつても、そりやア和女の天より授る福分が薄いのだから、一切  
 この乃公は知らないよ、また乃公の偉いところに關しないこつたから、その覺悟で  
 居れよ、宜いか、といへば甚だ冷淡至極で我まの勝手ばかり轉るやうだが、その  
 代り乃公は満身あらゆる愛情を以て和女に接するからね、つまり和女が乃公を偉い  
 ものとして立通してくれるのと、乃公が和女を天下唯一の味方として愛するのと、  
 こゝに合して夫婦の名實を成す所以だ、苟も物質的の世事一切を以て夫婦の感情に  
 訴へつこなしたよ、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、  
 乃公は偉い人と和女は可愛い人、この外に何にもな

いのだ、わかッたか」

「いえ段々お聞き申して、よく分りました、さう承ッた以上は妾も及ばずながら、萬事その覺悟で居りますから」

「む、それで宜い、儲さう極れば安心して、この偉い人も、そろ／＼門外を働き出さうよ、可愛い人は只よく家内を守ッてくれよ、これから和女の名を呼ばないで、ただ可愛い人、可愛い人と呼ぼうか」

「ほ、ほ、ほ、妾も良人を、偉い方、偉い方と呼びますよ」

「なるほど、それぢやアまるで狂者の夫婦もンだなア、しかし世間の俗物と一風、

また變ッて面白いかも知れないぜ、は、は、は、は、」

かの土田力が裸踊りに床板を踏み抜いて向脛を摺り剥き本所の割下水に迂り落ちて泥

人形となりつゝ障子越しの細君に叱られて顛へ上りし以來、また彼の黒田健次が例に依ッて例の如く心機一轉後の途上これを扶けて其家に送り込むや否、忽ち車を飛ばして何處ともなく闇に遁け出したる以來、わけてこの川上三吉が柳島に久しく空屋となりし草屋の軒より世事一切金色の當世に對うて何事をか爲さんとする、以上の消息は暫く紛々たる俗塵と颯々たる松風の間、まゝならぬ浮世の自然に任せ、いはぬが花の咲くか咲かぬか、人おの／＼其身の春に逢ふまで、

## 川上三吉後編

## 其一

人生そもく棺を蓋うて後に定まる論を苔の下より聴聞せんか、但しは生前たゞ一杯の酒に喰ひ酔つて鼻唄を唄ふに如かざるか、人生また五十年の通り相場たゞ一萬八千日、これを欠伸にすれば頗る長く、これを夢とすれば甚だ短く、長短おのく其人と其身とに應じて利害得失を異にすと雖も、そもく起きて働かんか寝て喰はんか、眼球たゞ一轉の作用に依つて人間の善悪を生じ首骨たゞ一個の上下に依つて生涯の吉凶を分つと思へば、人事いよく難しく怖しけれど、たゞ難しく怖しとて手も足も縮めしまゝでは濟まぬ世の中を、あまり捻り過ぎたる脳味噌は白癡の放屁一發に及ばず

生を得て死に至るの間、よしや長くとも短くとも五尺の身を縦にするか横にするかの工夫にありと思へば、人事またこれほど軽く易き業はなし、されど輕重難易は事の分量と時の程度にあるのみ、起きて働くものは有形の業を取つて身を勞し、寝て喰ふものは無形の業を取つて心を勞し、いづれ免れぬ苦は人間の常にして樂は一時の氣休めに過ぎず、もしそれ人事一切の苦を脱れて樂を願はゞ死んで浮世の埒をあけるに如かず、生きて血の氣の通ふ間は鍋に煮らるゝ鱈と等しく、たまたま飛んで跳ね出すとも忽然また抓んで投げ込まるゝ火宅の宿、あゝ己んぬる哉と叫べど儲そのまゝの無事には已まぬ人の生涯を奈何せん、されば人間うまれて何等か事をなすべしとの漠然たる指圖に従ひ、成敗消長は人力の外にして的にはならぬ運命の司どるところと諦め、もし善惡の因果この世の現在に報酬なくんば片便りの未來を願うて後世の天國に應報ありと我みづから我を慰めつゝ、

たゞ詮方なくく苦惱轉輾の間に生を送るべきか、否々さらに然らず大に然らず、そもそも人には別に高く清き靈魂微妙の活動あるがため、かくまで不自由に生れ斯くまで不完全に死すべきものにあらずといふ奴の生涯を見れば、此奴またこれ同じ不自由と不完全との間に蠢く動物のみ、何の智者も學者も哲理もあるべき、詮じ来れば人間これ毛蟲の如し、そもく葉蔭の巢を出でて梢を傳ふもの幾千萬中、無事に焼打の難を免れ竹竿の災を免れ鳶鴉の餌にもならずして、よく繭を作り繭を脱して蝶に飛び去るもの幾何かある、觀じ来れば人間これ蛆蟲の如し、いやしくも生あるうちは間斷なく動いて幾度か糞壺を這ひ上らんとすれど、また幾度か自ら下り落ちて元の糞汁に蠢く幾千萬中、やうやう志を遂げて廁や羽目板より這ひ出すもの幾何かある、

屈するは伸びんがための用意といへど、屈したまゝに腐りついて蹠の如く腰骨の抜けぬ奴あり、三年飛ばず啼かす飛べば天を衝き啼かば人を驚かすといへど、いつ見ても逢うても飛ばず啼かすに地を這ひ廻るのみか、たまくと跳ね上つても古壁一枚を貫く能はず、たまくと啼いても喚いても荒鼠一疋を驚かすこと能はざる奴あり、急くな騒ぐな乞ふ見よ大器晩成といへど、どの大器が何時晩成するやら、元來の器が龜裂われ死ぬまで物にならぬ奴あり、されば我こゝに屈せしまゝの腰骨うちぬかして蹠の如く這ひ廻るを恥づ、また久しく飛ばず啼かざる我こゝに古壁一枚を破る力もなく荒鼠一疋を追ふ聲もなくて止まんや、あはれ急かす騒がす三十三の曉まで斯くてありし我いたづらに死ぬまで無用の器を抱いて終るべきかと、奮勵一番、あらたに腕を叩き眼を張つて飛び出したる例の川上三吉は、正に是れ戰場に對ふ勇士の武者振ひに似たり、

智者の口よりも馬鹿の金が物いふ世の中、いかに振り廻す腕があつても身を置く巢が無うては渡れぬ當世と知りながら、他人の檜舞臺に借衣裳を着飾つて踊らんよりは、おのれが小屋掛の床板にて赤裸の力足を踏んで見たしと、富田正次の名は既に紳士として聞えたる岳父の芳情を謝し、行末の苦勞を承知の上で諸共にといふ妻の芳子を引き連れて、濱町の家を立出でつゝ土地もあるべきに都門の川を隔てし本所の果の片邊うき世の風を受けても折れぬ心の謎か、柳島の借屋住居に引移つてより茲に一月目の家賃を拂ひぬ、

その性と志は同じからずと雖も、その情と誼とに於ては骨肉に等しき五人のうち、かの倉橋幸藏は羽翼を伸ばして遠く萬里の海外に飛び去り、例の黒田健次は例に依つ

て例の如く何をするやら金あるうちは面を見せぬ奴、また上田力は昔ながらの上田力あはれ二十貫目の大兵を煙草の小賣店に横たへて常に一片の人生觀を讀むに等しき可憐漢、吉田雄藏は猶いまだ學窓の下に致々として校舎の門を出でざれば、由來こゝに一味の頭領と仰がれ先達とせられたる川上三吉が社會に對うての出處進退、まして多年こゝに以上の四人を無言の横目に監督せるが如き境遇にありし川上三吉、そもく如何なる抱負を提けて紛々たる門外の風塵に投ぜんとするか、

梅は春に魁して咲けど、人は多く世に後れて加之も咲くもの尠し、その世に後れて咲かぬ奴めが何事ぞ春に魁の花を見ながら、さらに恥づかしくとも思はず只ういたくと浮かれの調子、肩にする瓢箪は胸の邊に締括あれど、飲んで酔うた本人は五體の魂魄の置き所を忘れて、平生は呼子鳥の啼くべき柳島より龜井戸の近邊に時ならぬ雜沓を極

めぬ、  
 隠逸の君子といふ菊を俳優の人形首に飾って木戸錢とらるゝ團子阪繁昌の見物連が、  
 ぞろ／＼と亦こゝに群をなして梅屋敷へ押し寄する物凄さ、これが銀座か日本橋の中  
 央にあれば至極便利で猶更ら綺麗で面白かると吐す徒輩の多い證據は、おほろ月夜に  
 匂ふ梅が香の風情を訪ふもの一人もなく、白晝の雑沓に引き替へて夜は一入さらに物  
 淋し、

しかもこゝに引移りてより一月、やう／＼住み馴れしばかりの借屋住居に、軒を竝べ  
 し近處合壁もなくて、たゞ聞ゆるものは門前の川越しに響く妙見堂の太鼓と、春門の  
 藪越しに萩寺の鉦うちたゞく讀經の聲と、幽に吾孀の森か浮洲の森か葉越しの風を誘  
 ふ音、春の宵なれど何とやら秋か冬かの心地して、いとゞ歸家の遅き良人を待ち詫び  
 つゝ耳の遠き備ひ婆に談話甲斐もなく、たゞ獨り悄然とランプの灯影に身を倚せたる

徒然のまゝに朝の新聞をまた取出して讀み直す芳子の風情、すいた男に連れて行末の  
 苦勞また覺悟の憂身に落ち込まねど、いつしか浮世の女房めいて今は白襟の用なく半  
 襟の常着に馴れる横顔へ、わざとならぬ鬢の毛の一筋二筋、あはれを含んで元來の美  
 人いよく美し、

土地も淋しく人手もなき住居とて、家の内に火を點せば必ず門の戸を閉ちよといはれ  
 たる、その門口を軽く叩くは良人の歸りしかと、我にもあらず身を起して嬉しげに立  
 出づれば、門外より聲を聞き付けて、

「やア細君みづからの御出迎ひらしいな、こりやア恐縮だ、上田です、川上は居り  
 ますかね」

相も變らず言葉に愛敬あつて重からねど、二十貫目の大腹より呻り出して一點さらに  
 輕佻浮華の音なく、たとひ十年十五年の修行を積むとも生涯三味線の糸には乗らぬ聲

なり、

まちわびし良人ならねど、外ならぬ人の不意に訪ひ來し嬉しさ、そのまゝ門の戸を引き開くれば、例の大兵を悠々と運び入れて會釋もろとも、さらば川上の歸るまで暫し用心棒に置き給へと笑ひながら、いかに多年の隔心なくとも上田の性として主人の不在を守る妻女の手前、坐り直せし面壁の達磨に等しく、まづ差出されし茶を取って一口ぐつと呑めば、あやにく夜着の袖口に似たる上唇端へ残りし茶殻、ぶつと吹き上げて自己が獅子ツ鼻の先へ止まりしとも知らず、何とやら氣持の悪さに鼻の如き眼を瞬動いて、しかも人並すぐれし番臺面に稻妻を顯はせし體、どうしても自然の滑稽を帯びて不思議に呵しく出來たる男なり、

平生より萬事に慎み深き芳子も、おもはず吹き出さんとせし呵しさを、やうく奥齒に噛み殺して、

「おや上田さん、お顔に何だか塵埃のやうなものが」

いはれて满面ぬつと片手に撫で下しながら、ランプの火に掌中を差出して、

「はゝゝゝ、道理で變に氣持が悪かつた、こりやア茶殻だ、野人いつも禮を辨へず、今ぶつと吹き上げた拍子に、くつついたもンと見える、しかしこの大きい面も面、多年の風雨に曝し抜いて來た手柄ともいへないが、さて少々の小石ぐらゐるを真正面から抛け付けられても徹へぬ筈の無頓着な面へ、わづか蠅の羽に等しい茶殻一片が飛んで來て、へばり付くや否、忽ち妙に鼻が痒くなつて氣持が變に感じたところは細君、いかにも不思議ですな、つまり象皮めいた面の皮でも感覺の鈍い脳味噌でも、たま〜時に取つて人並の機敏な活動を呈する事があるらしい、はゝゝゝ、この分ぢやア上田力まだ急には死にますまいよ、我ながら困つたもんだ、ねエ細君」

「あら上田さん、いやな事を仰しやるよ、其お身體で貴君、ほゝゝゝ」

「いや、さうでない、古い文句だが無常の風は時を嫌はず、いくら丈夫でも確固でも肉體ですよ、なるほど五尺八寸二十貫目といふ厄介な荷物だから、さう脆くは縛つた縄の結目が切れもすまいが、常に蒲柳の質は攝生の點に油断がないから却つて長く保つの道理、しかし斯の如き喬木的の身體は得て不意に急折の激變を來すもんです、また徒らに普通を外れた無用の長大物は天の配劑に依つて除去するといふ理から考へても、危いもんだ」

「あれ、どうか遊ばしたのですか、なぜ今夜に限つて貴君、そんな嫌な事ばかり仰しやるの、お身體が大きうて早死するくらゐなら、世の中に相撲の繁昌は御坐いますまい」

「は、は、は、さういへば、それも一理だ、しかし拙者は近來どういふもンか、頻りに人生が飽きて來ましたよ、全體こんな事は貴君にいふべき筈でないが、鼻アには猶

更ら言へず子に語つても分らず、倉橋は遠く海外にあり黒田は御承知の通り吉田は未だ校舎の門を出でざる學生の身分、どうしても上田力が弱い音を吐いて愚癡をこぼすところは細君、外に無い、當家ですよ、實ア今夜、川上に逢つて、しみぐ、眞面目な談話をしようと思つて來たんですが、その川上の妻女たる貴女は歳が下でも姉のやうな心持がするから萬事かう無遠慮に打明けて、は、は、は、圖體が大きいばかりで漬物桶の重石にもならない弟を持つて、さぞ御迷惑でせうが、あきらめて下さい、ねエ細君」

「あら、どう御返答して宜しいやら、さう仰しやつては御挨拶に困まりますよ、しかし女の差出がましい生意氣な事を申すやうで御坐いますが、久しい間かう御兄弟同様にする方の中でも、あの黒田さんなどと違つて、良人は勿論、妾も、貴君ばかりは眞實に、失禮ながら他人とは存じませんよ、また斯うして父の膝下を離れました



上は猶更の事、萬事お頼りに思ふのは上田さん、たゞ貴君御夫婦ばかり、どうか及ばないところは御遠慮なく、お叱り下さいまして、相變らず行末の御世話を願ひたく御坐います」

「や、細君、さう出ちやア不可ン、さう慇懃に出られると聊か改ッて追ひ返さるゝが如しで、ちよいと二の句が次けないから、やはり厄介な愚弟が無用の舌を動かすぐらゐの調子に聞いて貰ひたい、はゝゝゝ思ふ事はねば腹ふくるゝ諺でね、つまり麥藁細工の笛と一般、をりくゝ吹いて見ないと何だか腸の底に塵埃の溜ったやうな氣持がする、しかし上田力、咽喉に蟲が湧いても餘所の他人に對ッて斯の如き愚は演じないです」

「いえ貴君、いくら何を仰しやッても宜しう御坐いますが、世の中が嫌になつたの、また急折がするのと、そんな不吉な事だけは、よう承りませんよ」

「はゝゝゝぢやア不吉談は一切禁物としませう、ところで由來この上田そもくゝ人生の價値として何の慶すべく賞すべく賀すべき點やある、人間は御覽の通り至極お目出たく出來て居るが、儲する事なす事、今日まで更に満足の屁も得放らざりし白癡ですからなア」

「また貴君、もう御免を蒙ります、女のくせに大膽な、そんな事を貴君に平氣で伺ッて居ては良人に叱られますから」

「こりやア困ツた、殆ど談話の種ぎれだ、しかし川上は遅いですが、全體どこへ往つたんですか、いつごろ出ました」

「晝の御飯を濟まして、すぐで御坐います、こゝへ引移ッてから一月になります、かう夜に入ッて歸らない事は始めて、また出る時は、どこへとも申さないで只そのまゝ」

「む、しかし心配するに及ばない、たとひ鬼の棲家へ投げ込んでも無事に歸つて來る男だから大丈夫、湯でも能く沸かして、喰はなくつても夕飯の膳だけはして置いて遣つて下さいよ、御如才なからうが、こりやア貴君の役目だ、ね、ところで川上の歸るまで幸ひ留守居の片相手をしませう」

「いえ、その用意だけは致して御坐いますが、なアに貴君、これから度々どういふ用事の都合で、これよりまだ遅くなる事が續くかも知れませんが、ほ、ほ、ほ、始めて世帯を持つた修行のため却つて妾が一人で、貴君だつて、お宅が」

「いや、その段に至つては實に安心なものです、この邊とは違つて夜が更けても兩國橋に近い軒並び、かの音に名高い百本杭の物妻さは昔のこつてすよ、しかも御承知の鼻ア殿、この二十貫目の大男と當年四歳の小兒を両手に抱へて重い軽いがないといふほどの勢ひですから、うかく、狼狼へた盜賊が戸惑ひでもして這入らうもんな

ら、は、は、は、は、は、忽ち石臼大の尻に押し潰されて息の根が止まりますよ」

「ほ、ほ、ほ、ほ、ほ、まア貴君、いくら御戲談でも、あんまり酷い事を仰しやるよ」

「何、決して針小棒大の言でない、あの誰が手にも足にも合はなかつた黒田の横着野郎でさへ、いつも鼻アに對つては閉口頓首、さらに顔色なかつたくらゐです、ましてや良人たる名のみあつて能力なく資格なく效もなく益もないばかりか、却つて其あはれに優しく絶え間なき働きの下に蠢爾たる乃公の如きは、ぐうの音も出ない、否、いやしくも出すべき筈のもんでない、しかも猶その苦勞が掛け足らいで、あの上は無用の子まで生まれました妻ですから、實は可哀さうですよ、いかに夫婦とはいへ氣の毒の至極です、あ、思へば苦學十年そもく、今となつて何のためぞ、もし學ばずんば土方人足となつても自己一人前の浮世を渡るべきに、たゞ學びしがため人間の化物となつて妻子を持ちながら半人前の世間も渡り得ず、徒らに際限なき空想理

論を追うて今こゝに得るところは朝飯の納豆汁一杯に及ばず、空しく無用の意氣軒昂を恣にして今こゝに言ふところは霜夜の叫ぶ按摩の笛の音にも如かざる愚物一體、殆ど捨て場もないくらゐの境遇です、早い談話が着物一枚にしても世間普通の反物では足らず、死んだところで世間普通の棺桶では逆も治らぬといふ厄介物、どうしたもんでせうな細君、實に我ながら愛想が盡きて始末に困りますよ」

「また貴君、そんな事を、お約束が違ふぢや御坐いませんか、しかし今夜は何だか妙に、をかした事ばかり仰しやるのねエ、いッそ御酒でも召上ッては如何です、御存じの通り良人は餘り飲まない方ですが、これまでと遣ッて段々いろく、心配の増える發端ですから、言ひ付けられません。が妾の心で少々づゝの用意は致して御坐いますよ」

「はゝゝゝゝ酒ですか、はゝゝゝゝ酒は悪くないが、まづ止さう、そら當家へ轉宅

の手傳ひに來た晩、へゞれけに酔ッぱらッて、裸踊りの狂氣沙汰に床板踏み抜きの失策を演じたのみか、本所の割下水へ落ち込んで五尺八寸の泥人形となり、家に歸ッては鼻アに障子越しの叱咤攻撃さんく、其まゝ暫く庭口で立往生の責苦に逢ッた果が、わざく寝て居た小兒まで引き起して、あれ御覽この化物が汝を生んだお父様だよと言ふや否、わッと子に泣き出された時は、おもはず地獄の呵責に鞭たるゝが如く人生一種の感に迫ッて腸九廻するの苦痛でしたな、以來こゝに禁酒々々」

「ほゝゝゝゝ随分、ひどい目にお逢ひなすッた事ね、しかし今夜のやうに御氣分の沈んだ時は少しぐらゐる貴君、宜いぢやア御坐いませんか、そのうちには良人も歸ッて來ませうから」

「いや、禁酒々々、斷じて一滴も飲まない、その代り茶を下さい、ぐツと眼の覺めるほど苦いところを一口、なアに分量さへ平均すれば茶も酒も同じ興奮劑ですよ、た



「ほんとに遅う御坐いますこと、かう遅くなるなら、ちよいと濱町の家へ寄ッて誰か使の者を、ねエ貴君」

「さやう、しかし今に歸りますよ、もし十二時にでもなると思やア其邊の事に如才も脱落もない男ですから、まづ安心して話頭一轉、梅の談話でもしませう、さぞ此ごろの晝間は俗物の躰音遠雷の如しでせうな、だが人生の九分九厘まで俗物で持ッた世の中、實は俗物が人間の本來で、俗を外れた崎人も偉人も一切これ出来損ッた人類の怪物、いはゞ俗物多數の力で建て聯ねたお長屋の片隅を無家賃のお情に拜借して、やうく僅に孤獨よがりの自惚氣焰を吐いてるやうなモンですよ、わけて咄この先生などは其お長屋の端さへ拜借しかねて年が年中うろくと軒下を彷徨ふ體、はゞ、まるで飼手のない迷ひ犬ですな、や、また御意に觸るやうな事を言ひ出した、不吉々々、さらば一番、大に茶がッツて壯快な詩吟でもやらかしませうか、は

はゞ、しかし、もう十一時を過ぎたな、こりやア川上、なるほど思ひの外、遅いわい」

## 其二

上田が川上を訪はんとて立出づるや否、わづか一步の前後に川上三吉また上田の家を訪ひつゝ、きけば前夜より今朝へかけて何とやら打沈みしのみか平生に似合はぬ晝寢までして夕飯も其まゝに出でしとの妻女が言葉、しかも柳島の我家へ行きしとの事に川上おもはず眉を蹙めながら、わざと用なき腰おちつけて語り出しぬ、

「何、さう心配するほどのこツても無いでせう、無論、誰だツて心持の宜い時ばかりはないから、たま／＼何か感じて、ちよいと一時その常に反するやうな事もあるもんだ、まして上田の如きは殆ど一種の理想家で、普通以下の浮世を渡るには餘り人

間が立派過ぎて、それがため却って俗に合はないところがある理由だ」

「ほ、ほ、何だか存じませんが、立派過ぎるより恍惚過ぎたところが多くって困ります、しかし善い事でも悪い事でも一切すぐ貴君の御宅へ伺ふだけが、どれほど妾の身に取って安堵いたしますか、もしこれが同じこって黒田さんの家ででもあれば、それこそ大變、うっかり門口へも出せません、あの黒田さんが手前方の二階で、ろく／＼まだ病氣も癒らない時すら貴君、萬事そつと妾に隠して、いろ／＼な悪智を付ける人で御坐いますもの、また良人も妾の前や口でこそ大きな聲して今にも噛み付くさうに吐鳴って居ながら、どういふもんか蔭になると貴君、ほ、ほ、まるで馬鹿な色女が色男に欺されるやうな調子ですから、あの大きい圖體を只一口の丸呑にされて、それは／＼齒痒い事が御坐いましたが、その薄氣味の悪い油斷のならない黒田さんも、當分お姿を見せないとかで、どこに在らッしやるか、倉橋さんは御洋

行遊ばしたし、吉田さんは罪のない方、御迷惑ながら何事でも只今は貴君ばかりで安心いたして居ります」

「は、ほ、ほ、我家の妻も其通りで、どこへ往つても黒田は嫌はれもんだが、儲また徹頭徹尾さう捨てた奴でもない、しかし難物には相違ない、その度し難い難物を人知れず蔭に廻って飽くまで世話をするとところが、即ち上田の上田たる所以だから、萬事その邊の調子を能く呑み込んでやっ下さい、ね、上田のやうな單純潔白の性を以て複雑汚濁の世に處せんとするには最も内助の効が必要だ、また何の役にも立たないが川上三吉かくてある以上、上田の身に大した間違ひはさせない覺悟だ、ところで現に今夜の如き何を感じたか平生にない晝寢をして夕飯も喰はず其ま、飛び出したのは、結局この川上より外に満腹の不平を快く洩らすところが無いからだと思やア、十餘年來の交情友誼に於て實に忍びざるの涙あるのみだ、しかし強弓も張るこ



と、手厳しく妻に突ツ込まれた事もあつたが、つまり黒田の三千五百圓は殆ど縁切金同然だ、しかし上田と吉田は其金の有無多少に依ッて其交情に深淺ある所以でないから、兎も角も濱町の岳父に保管さして置いたもの、なるほど考へて見ると妻の不平にも一理あつて、しかも吉田は前々より學資を與へて勉強さしてあるのみか、業を卒へて世に出れば其日すぐ相應の價値も定まる男、たゞ上田は今日この境遇で妻もあり子もあるといふ理由だから、かう割り付けた、つまり六千五百圓のうち四千五百圓を上田の分とし、二千圓だけ吉田が他日の用意に供してやる心算で、勿論この事は本人の倉橋へも委細既に通じてやつたが異論のある筈はない、そこで四千五百圓の現金、今すぐ上田に費へと言つても受ける男でなく、第一また俄に目下必要の費途もなからうから、こりやア何處か確固な會社で年に一割ぐらゐる配當ある株券にでもして置いて、その元金は小兒の教育費だ、夫婦は只その利潤だけで長

く質素に暮して貰ひたい、四千五百圓を一割とすれば四百十五圓、よし七分としても年に三百十餘圓ある勘定で、一月に二十五六圓づつの世帯を助ける事が出來りやア、一家三人まづ飢餓に迫る恐慌はない、また實際あの上田に足るを知るだけの衣食住を與へ以て浮世の俗事に顧慮なからしめば、それこそ超然として凡流に飛び放れた立派な人物だ、願はくは上田の如き男に米の小買や味噌醬油の心配をさせたくない、しかし黒田より妙きを怒らすとも吉田より多きを快からず思ふ性質だから、今いうた分配方法は當分のうち黙ッて居て下さいよ、株券は小兒の名にして、たゞ濱町の岳父が預ツた當然の利分だといふ工合に月々、送りますからね、よろしいか」

「はい、妾といひ良人と申し、多年の御恩を蒙りました上、また只今のやうな結構な思召、實に何とも、かとも、言葉には」



「なアに萬事、お互のこつた」

「何分、どうか宜しう、お願ひ申し上げます、夫婦は假令、いかやうな苦勞を致しましても、せめて小兒だけはと、平生たゞ其事ばかり」

「いや道理、道理、人物の點に於て鑑定違ひの不足は聞かない決心だが、さて浮世といふ點に於ては聊か、不足をいはれても威張つた返答の出来ない良人を持たしたの、全く我々夫婦だから、當家の利害には免るべからざる責任を脊負つて居ます、わけて雙方の夫婦間、良人と良人、妻と妻、おのゝ深い關係を繋ぎ合つて一朝一夕に出来た理由でない、實に聯環の縁だ」

「どう致しまして、恐れ入ります、もし小兒でも御坐いませねば、絶えず伺つて、御不自由はなくとも奥様の御用をすべき筈の妾が」

「いや、その邊の事を言ひ出しちや不可ない、いくら隔心のない兄弟のやうでも上田

に對して濟まないから、以來一切、濱町に居つた時分の氣を出しては困る、困りますよ、これは改めて確と言つて置きます、また妻も今までとは違つて、良人に従ふ浮世の苦勞は其身の修行だ、朝夕の飯を炊いて小買物に出る傭ひ婆が一人あれば宜しい、その上の事は段々その功を積んで後日の事、可哀さうだが當分あの方が却つて身の爲です、しかし知らるゝ通りの懐中生育で、はゝゝゝ、俄に借屋住居の新世帯、をりゝ腹の皮が糾れるほどの呵しい失策をしてね、むしろ滑稽だ」

「ほゝゝゝその邊は貴君、御無理も御坐いませんから、萬事お察し遊ばして、よく教へて戴かねば」

「だから一切、決して吐りも何もしない、たゞ呵しいと笑ふばかりさ、や、小兒が泣いてるぜ、早く往つてやりなさい」

「おやく、よつと寢て居りましたが、夢でも、ほゝゝゝ妙なもんで御坐います

よ、もう貴君、をりく、晝間の事を夢で見るとなりましたから」  
 「さうでせうな、しかし早く、はやく、大變に泣き出した、ところで今、隣屋に鳴ったのは十一時らしい、儲もう宜い時分だらう、どりや歸ッて上田と交代しようかね、は、は、は、道理、争はれないもんだ、どツか泣聲が段々と上田に似て來たわい、二十貫目の大男が骨に徹へて身の境涯を歎ずるのも無理はない」

## 其三

前夜の十二時前、やうく柳島の家かへに歸れば、上田先生せんせいまだ妻の芳子よしこを相手に茶氣ちやきを帯びたる氣焰きえんの眞ツ最中さいちゆうとて、なか／＼俄にはかたちに立ち去る氣色けしきもなく、いよく錨いかりを卸して一時過ぎまで其まゝの餘威よゐに當てられ、さらぬも人知れぬ半日の活動はたらきに勞れし腦なうを枕まくらに横たへしは二時前後、わけて短き春の夜たゞ一睡すゐの夢ゆめに過ぎて、はや曉あかつきの今朝けさとなれば流石さすがの川上三吉かみかみ さんきちも兩眼りやうがんほツとして睡ねたけなり、

なれば流石さすがの川上三吉かみかみ さんきちも兩眼りやうがんほツとして睡ねたけなり、  
 かゝる時には幸さいひの睡氣ねひけざましに運動うんどうかた／＼、聊いさか後おくれたれど花はなは未だ散りも盡つくさぬ香氣かうき馥郁ふくいくの下もとに逍遙せうようして、この眼めを清きよめ腦なうを新あらたにせんと、朝飯あさめしの膳ぜんも待たず其まゝ、我家わがやを立出たちいでつゝ、用ようなき天神てんじんの境内けいだいを通りぬけて臥龍梅ぶりやうばいの門前もんぜんに出づれば、はや何者ものか二臺だいの車くるまを待たせて我われより先斷さきかきの風流武者ふうりゆうむしやありと覺おぼゆ、  
 きらく／＼と照り渡る日中に只ただがや／＼と押し合あうて見物けんぶつに來る奴やつばかりかと思おもひの外ほか、また露つゆを含ふくめる看梅かんばいの客きやくもありと思おもひながら、何なんとやら友ともを得たるの心地こころち、ぶら／＼と歩あゆみ入りつゝ、白しろく花はなを宿やどして編あめるが如ごとき梢こぎすの下もとより、黒くろく横よこたはりて組くめるが如ごとき幹みきの彼方かなたを見れば、正まさしく門前もんぜんに車くるまを乗のり捨すてし二人ふたりの後姿うしろかた、半山形はんやまがたの茶帽ちやぼう子しに薄色うすいろ鼠ねずみの外ぐわい套とうを纏まとひ細ほそきステッキを携たづへて太ふとき葉卷はまきを薰くゆらす紳士體しんしていの洋服男やうふくをとこと、大島おほしま紬つじぎの常着羽織つねぎ はおりに平ひらお召めしの重かさね裾すそを何なんの氣きなしに輕かるく歩あゆむ銀杏返いんげんがへしの美人びじん、あゝ儲さては此こ

奴また當世仕立の有財餓鬼、男といひ女といひ梅に圍はれながら梅あるかとも思はで頻りに寄り添ふ喃々喋々、とても尋常の夫婦ではなく前夜いづこの穴より今朝こゝに這ひ出せしか、有限春宵無限情と吐すか知らねど、つまりは終夜の口説が足りいで人なき曉方の此梅園に仕残しの癡話を演ずる奴、もし梅に心あらば瓣を反けて醜を厭はんかと、その後姿を冷かに見送りながら踵を返して左の方に廻れば、やがてまた右の梅香一路より戯れ来る今の男女と真正面の出口に落ち合ひぬ、  
 がやくと押し合せて日中の見物に来る奴よりは、此奴また更に輪をかけたる大俗物、いかなる面かと思れば、や、や、思ひも寄らぬ黒田健次が浮世の白癡威嚇に化けたる一夜づくりの紳士面なり、  
 たとひ親兄弟の復仇に出喰はすとも、さのみは驚かぬ横着漢ながら、川上も川上これまでの川上とは違つて、心機一轉もし志を得ずんば兩ひ逢はずと誓ひしより二月た

つか経たぬ今、白粉臭き化粧の女を連れて宿酔いまだ醒めざる體を、その川上に一目ぐつと睨まれたる黒田の驚愕、流石の鐵面皮も張り裂けしが如く慌て、  
 「やア、これは、どうも、やア、と、飛んだ處で君、は、は、は、相變らず細君ますます御機嫌かな、梅、君、もう梅も末らしいな」  
 川上三吉さらに冷かなる眼を開いて黒田の脚下より頭上まで見上げ見下しつゝ、また斜めに女の容貌じろくと打守りながら、黒田が地に捨てし葉卷の吸殻を指さして、無言の片手を伸ばせば、いよく薄氣味わるく慌て、ボツケツトより探り出せしは露西亞革の折財布、川上さつと手早く奪うて懷中に捻ぢ込みし後、また更に片手を伸ばすは煙草を出せとの意味、黒田ますく、狼狽へて取られし紙入を返せとも得いはず、半泣きの澁面しぶく、残りの葉卷三本そのそゝに差出せば、靜に受取つて二本を袂に入れ一本を指に挿んで今度はマッチを摺れとの手眞似、生憎マッチは女の手にありて

美人おそろく火を摺れば、おのれが年久しく召使ひし下女に對ふが如き川上の體、會釋は固より首肯きもせず、また無言のまゝ見返りもせず悠々と煙を吹いて立去りぬ、

いかな黒田も人には見せぬ弱い急所を不意に取つて押へられ、しかも一切たゞ無言の責苦に逢はされ、狛狹へて取違へし紙入まで巻き上げられて、今更ら怒りもならず笑ひもならず呼び返されもせず、暫し惘然と立つたるまゝに川上の後姿を見送りしが、門前に待てる車夫の手前もあり、第一は連れし女に對しての面目なさ、もしこれが同じ不意討でも上田ならばと、思はず苦しまぎれの空笑を發しぬ、

「はッは、とんでもない奴に出ツ喰はしたよ、ありやア乃公が幽な遠縁の端になる男でね、實ア啞だ、しかも近來少々、氣が變になつたらしいといふ噂を聞いたが、なるほど、どうも本氣の沙汰ぢやア無いわい、困つた奴だなア」

「おや、啞なんですか、道理で呵しな手眞似ばかりする人だと思つて居ましたが、おまけにキの字と、來ちやア、あんまり御丁寧過ぎたお客様に逢ひましたね、しかし貴君、紙入まで」

「なアに宜いさ、費ひ残りの端た錢だ、三十圓たア無かつたらうが、間違つて出した紙入を引ツ奪つた手先の素早さ、三本の煙草を二本ちよいと袂へ突ツ込んだ工合、どうも慾から出た狂氣らしいな、とはいふもんの可哀さうな奴だ、あれでも和女、なか／＼澁ッ皮の剥けた頗る的の鼻アを持つてるぜ」

「おや、嚙お氣が揉めるこつてせうよ、ねエ、まさか他人の間でも無けりやア貴君、何とか深切に世話をしてお上げなさいよ、今の啞では無い事よ、その意氣な好いたらしい妻女を、ほ、ほ、ほ、ほ」

「ところが彼奴の鼻アは運の宜い女で、似て居ないよ、和女に」

「あれ、妾にですか、妾に似なくツても貴君、亡夫人かに肖れば宜しいでせう、全體死んだ死んだと仰しやるが、もし故郷にでも洒ア〜と生きて在らツしやるンぢやア御坐いませンの、何だか怪しい事ね、あんまり絶えず口癖に仰しやるから」  
 「は、は、は、つまらない事をいふな、亡妻が生きてさへ居りやア、かうまで和女に脆くしてやられるモンか」

「おやまア、唐突に手厳しい事、つまり妾は玩弄の贗札みたやうなモンですネエ、ちよいと紛らはしいところがあるから當分お心休めの御坐興、あら酷い事」

「此方より其方が酷いのだ、何故また彼時、うかく〜と兩國橋などを通るんだ、しかも車と車が押し合ッてさ、しみ〜面を見さすたア御念の入ッた罪の深いこッたぜ、いくら啞でも氣狂でも定めし何とか思ツたらうよ、朝ッぱらから白粉氣のある女を連れて梅見に迷ひ込むたア乃公こそ狂氣の沙汰だ、恥づべし恥づべし、しかし

落ちて仕舞ツた戀の因果の水底で今更ら仕様がなから、どうか其方で氣の付いた時は遠慮なしに突ッ放してくれ、せめて息の根のあるうちに浮びたいよ」

「何とでも仰しやい、妾は一步お先へ歸りますから」

「どこへ歸る、おい今日は乃公の宿へ來ちやア不可ンぜ、まッ直に自分の巢へ」

「ほ、ほ、ほ、どツちへ歸るか今のところでは分りませンの、た、車の輪が廻ッて梶棒の落ち着いた門口が今日の塙ですよ、しかし先づ築地邊の方角らしう思はれますが」

「おい〜、そんな馬鹿暢氣をいはずと眞面目に歸れよ、第一、今日は乃公の宿へ少むづかしい客が三四人も來る筈に約束して置いたから、べろ〜正體を現されちやア困るよ」

「それでは今日の晝間だけ堪忍してあけますから、夕方、どこへも出ちやア承知いたしませんよ、宜しう御坐いますか」

「いや、夜は猶更ら、百人ばかりの客が隊を組んで押し寄せて来る筈だ、うかくすと踏み殺されるぞ」

「ほ、ほ、ほ、お馴染甲斐に死骸の始末さへして下さりやア宜う御坐いますよ、どうせ貴君、生命がけですもの」

「よく饒舌るな、黙って早く行けよ、始め見た時は、も少し静淑な質だと思つたに、段々お里を出して、きやんところが激しくなつたぜ、どうかすると全然、でんばふ肌だ」

「他事ですか、貴君だつて、おひく、外觀によらない鐵火なところが出て來ましたよ、譽めて申せば洋服仕立の旦那様とは思はれないほど意氣な勇み肌がありますもの、いッそ刺子の半纏と盲縞の腹掛股引を用意して置きませうか」

「馬鹿、そこまで落ちてたまるかい」

あれほど確に固く誓つて心機一轉と吐した舌の根の乾かぬうち、はや白癡威嚇の當世服を纏うて一夜づくりの紳士面に白粉氣の化物を引き連れながら、朝ほらけの梅見に宵越しの癡話を演ずるとは彼奴いかにしても度し難し、

あ、倉橋が芳情に残したる一萬圓、口にこそ言はねど實は我その倉橋の影に力を盡して残したる折角の一萬圓も、はや三千五百圓は彼奴が白癡の手を経て無念や今の白粉氣に吸ひ取られたり、

されど世の中に女といへば忽ち死せし貞女の亡妻を思ひ出すべき筈の奴、しかも元來その道には人並すぐれて敵を欺すとも敵には欺されぬ筈の素早い奴、ましてかの三千五百圓は其效果の有無に依つて十餘年來の我々と絶つか絶たぬの境は固より承知の筈の奴、また難物といはる、だけに性來の根性骨は張つて、浮世の萬事は暗闇の間道よ

でも心得たる筈の鋭い奴、その黒田奴が今更ら初心めいたるあの愚状は何事ぞ、せめて三千五百圓を片手に擲んで乗るか反るかの一足飛びをすれば、よし的外れた投機界の米でも株でも、覺あて痕なき寢言に等しき山でも海でも、なるほど彼奴は彼奴相應の失敗かくあるべき事と、冷罵嘲弄の中にも多少の首肯く點はあれど、もはや器は碎けて微塵となつたり、搔き集めて焼き直しても詮なし、亂れたり狂うたり墮落せりと、清濁ともに呑み込んで胃の腑を損ぜざる流石の川上三吉も、おもはず舌鼓を打つて悲憤の歎聲を發しぬ、

されどまた我を一目みるや否、あれほどの糞度胸ある横着漢が、忽ち五體を電氣にかけられたる如く、はつと驚き、ぶる／＼震うて狼狽へたる苦しまぎれに煙草と紙入を取違へて差出したる體、いかにも自己が心に恥ぢて度を失ひし呵しき、おめ／＼人に物とられて其まゝ塵埃一本も見遁すべき奴ではないに、よく／＼腸が顛倒して面

目なければこそ、思へば聊か何とやら哀れの一節もありと、我家に立歸りて人知れず机の前、そつと其紙入を開けば、十圓紙幣二枚に一圓紙幣八枚、數葉の名刺には京橋區築地三丁目春洋館止宿と六號文字の肩書して黒田健次と隸書の石版摺、さては聞き及ぶ紳士的高等下宿に蟠居して彼奴そも／＼何事をかする、もしこの外に今の白粉臭き奴より送りし内證の戀文でもあらば一入の馬脚を現すべきに、流石は青くない奴まだ其處まで腐らねど世に立つ一貫の男としては既に臭氣紛々、名刺だけを抜いて紙入を指頭に抓みながら、をりしも朝餐の膳を持ち來りし妻の芳子に對うて、から／＼と高く笑ひ出しぬ、

「おい今、ぶらく／＼と臥龍梅から歸途に、こんな物を拾つたよ、中に二十八圓あるがどうしたもんだらうな、わざ／＼警察へ届けるのも面倒だ、何とか工夫あるまいかね、まさか元の場所へ捨てにも行かれずさ」

「おやまア、御運の宜い事、やはり何かのお目出たい前兆で御坐いますよ、しかし始末に困りますねエ、落した方は嘸、もし中に名刺でも這入っては居りませんか、そりやア良人、洋服持ですから是非とも名刺の一二枚は」

「ところが書いたもの一切、反故の切端もないよ、どうだ和女、そつと猫糞を極め込で頭髮の根掛か簪の珠でも買ッちやア、それとも長襦袢にでもするかね、ちよいと出の帯ぐらゐは大丈夫だぜ、は、は、は、は」

「あら、いやな事を仰しやる、氣味の悪い、いくら何でも人の遺憾のか、ツたものを身に付けたくは御坐いませんよ、御面倒でも良人、警察へ、さうしていたゞかないと氣になつて不可ませんから」

「だつて和女、手数が煩いよ、これッばかりの金で、何とか宜い工夫のありさうなものだが、當らお觸ッず」

「しかし良人、このまゝ持つて在られるもんで御坐いませんから、まア御運の開く前兆とでも思召して、それだけの御手数ぐらゐは」

「や考へ付いた、同じ手数と面倒が掛るなら、養育院へ寄附して仕舞はう、どんな奴が落したつて構はない、これを公共的の慈善事業に投ずれば決して疚しからずだ、毛糸で編んだ巾着か破れ財布に這入った銅貨なら却つて落し主の迷惑を察して、わざと警察へ届けてもやらうし、また取りにも来るだらうが、これ見ろ、鳥の子紙のやうな魯西亞革の二枚折で金の数は少くつても皺のない揃った紙幣だ、どうせ不自由のない氣樂蜻蜒のポケットを脱け出したに相違あるまいから、わざと骨を折つて逆戻しするには及ばないよ、しかも場所が場所だ、もし白粉臭い女でも連れ

て暢氣に朝の梅見と洒落れ出した奴でもありやア寧ろ妙だ、罪亡しに養育院の寄附は其奴の冥加になるさ、は、は、は、紙入は糞壺へ叩き込んで金だけ慈善の一端に



供してやらう」

「なるほど、うツかり致して居りました、養育院とは結構なところへ良人お氣が付きました事、しかし拾ったまゝの二十八圓では何だか變で御坐いますから二圓だけ足して都合三十圓」

「む、さうだな、そりやア乃公より一步、ちよいと上手の考案だ、ぢやア都合三十圓無名氏として投げ込まう、如何にも名案だ、それに限る、出来たく」

「しかし良人、もし萬々一、どんな拍子で知れるやうな事は御坐いますまいか」

「大丈夫、心配なし、よしまた知れたツて平氣だ、二十八圓を拾つて繁文褥禮の警察へ届けるのが面倒だから二圓を加へて都合三十圓そのまゝ、單純潔白に養育院へ寄附したと言やア却つて面白い、しかも他の財を取つて身の名を賣らざる證據歴々、無名氏だ、は、は、は、たとひ事を好む俗吏輩が一方から反則云々を叫んでも、固より

悪意がなくツて利慾の結果を收めない慈善の所爲だから罪は構成しない、しかし以上は和女に安心するための理窟で、事實に於ては大丈夫、どうしても知れる筈がな  
いよ、もし強ひて罪にセンとすれば事は少なりと雖も法律適用の一問題になるらしいこつた、なか／＼面白いよ、は、は、は、」

「いくら面白くツても良人、そんな事で名前の出るのは眞平で御坐いますよ」

「だからさ、大丈夫だと言つてるぢやアないか、さて飯だ、前夜は二時ごろまで上田の氣焔に中てられて、とろ／＼と睡つたばかりの身體を今朝すぐ運動したもんだから、わけて平生よりは腹が空いた、しかし今までと違つて借屋住居の新世帯で喰ふ飯は格別また美味しいな、この分で他日ぐツと志を得た山海の珍味は猶更ら以て一段だけ、ねエ、おい、確固してくれよ、そろ／＼社會の見物を控へて今が序幕の道具だて最中だ、幕間に驅け込む樂屋の手當は和女の役だからなア、そら過日も言ふ

通り、あくまで乃公を偉いもんにして、氣を落さないやう始終うまく、おだてぬいてくれよ、古今ともに如何なる英雄豪傑でも、良人の弱點を能く知るは妻にあり、その妻に根城の本丸で嫌な顔を見せられちやア實に閉口するからなア、は、は、は、は、は、は、天下た、一人の味方は和女だよ」

「どう致しまして良人、妾に、そんな大役は持てませんから、いちく、吐ッてさへ戴けば自然、馬鹿は馬鹿だけの一所懸命で」

「まア何でも宜い、たゞ乃公を偉いもんにして置いてくれ、時に此、味噌汁は和女の手加減かね」

「はい、どうせ良人お口に合ひますまいが、きのふの朝までは婆や、妾は今朝、始めてですもの」

「いや、なか／＼美味いよ、始めての手加減にしちやア頗る大出来だ、隅には置けな

い、これでは是非とも上田の妻を呼んで一度、自慢するが宜い、よほど昨夜も和女の世帯向に就いて心配して居るらしかつたよ、しかし驚くぜ、まさか斯れほど上手たア思へないからなア由來、和女の身分として」

「おや、とんだ御褒美に預ります事、なるほど心配してくれますのは無理も御坐いません、今までが今まで、ほんとに世間知らずの妾ですから」

「は、は、は、は、この様子ぢやア大に見込がある、あすの朝は婆に米だけ洗はして、飯は和女か炊いて見な、まッ黒に焦しちやア不可ないが、狐色ぐらゐまでは堪忍して卒業證書を與へるからね」

「ほ、ほ、ほ、過日から始終、婆やに教ッて居りますが、御飯は良人、一番、むづかしいさうですよ」

「だからさ、飯も立派に炊け煮物も上手に出来て、およそ炊事一切調理萬端これで差

支ないといふやうになつたら、一日、濱町の家へ出掛けて、下女にも誰にも手傳はさず和女一人で、お父様に御膳を差上げて見るんだ、驚くぜ、びっくりして泣くかも知れないが、また翻つて考へりやア、キツと喜ばれるに相違ない、而して後、段と奥様の資格を備へて、幾人でも下女下男を召使へば確固なものだ、ね、格に入つて格を出でずンば物その要を得ずで、眞實に書法を修行した奴の我流は、どんな字體を崩しても風韻があつて能く讀めるが、さて最初、理に突ツ飛た下手な奴の走り書と來ちやアとても無効だからな、萬事それと同じこつた」

「はい、眞實で御坐いますね、なるべく油断のないやうに、一日も早く覺えて、ほ、ほ、お父様を驚愕させてあげませう、もし、さうしたら、どんな顔をなさるでせうか、ほ、ほ、見たう御坐いますワ」

「は、まづ其前に上田の妻を呼んで、驚かす稽古をするんだ、考へて見ると貧

乏世帯も随分、時に取つて面白いもんだらう、面白くなくツても、まづ面白いとして渡るんだ、や、うかく饒舌ツて二碗ばかり飯を喰ひ過ぎたぜ、なぜ和女、給仕しながら喰ひ過ぎすんだよ、いつも朝は三碗に極ツてるぢやアないか」

「ほ、ほ、ほ、だつて良人、お出しなさるからですよ、それに平生よりは、お腹が空いたと仰しやツたぢや御坐いませんか」

「は、まづなるほど、こりやア乃公が無理だ、しかし喰ひ過ぎた、おまけに汁の出來を譽めたから盛が宜かつた故か、ひどく腹に徹へたよ、今の二碗は確實に平常の四五碗に敵したな、は、まづ、まづこの通り和女の調子た、一事で圖に乗ツて自己が腹加減を忘れるほどだから、恐るべき其潛勢力を如才なく巧みに利用して、この川上三吉を天晴れ立派な男にしてくれよ、佛法と鐵砲と女房は昔より油断のならない怪物で、しかも天下第一の敵なきものに譬へてあるくらゐだ、やれ怖しい、それ、

「忽然そんな目をして睨むんだもの、うかく傍へも寄せない、は、は、は、」

「どうとも良人の好きな事を仰しやい、時に今日は、お出ましですか」

「いや、別段これといふ用もないから、今日だけは一日、籠城して英氣を養はう、七八日以来、絶えず出て聊か幾何の得たところ無きにしもあらずの骨休めだ、もう一二週間もすりやア、かねてより乃公が計畫の一端を社會に打出す前、まづ和女に談話して見るからね、今、暫時の間だ、毎日々々何のために出歩くか噯、不思議だらうが黙って居てくれよ」

「妾が良人、そんな事を、承らないでも宜しう御坐いますから、たゞ何卒、御立派に、お目的の達する事だけを祈って居りますもの、あまり御心配が過ぎて、萬一お身體に觸るやうな事が出来ましては却って、第一お父様に叱られますよ」

「は、は、は、半襟の縞着物を着せても、どツか矢張り未だ元の嬢様だ、をりく不意

に妙な事を言ひ出すよ、乃公が病氣になつたつて和女の業なもんか、醫者でも預つた病人を殺すぢやアないか、しかし乃公の身體は大丈夫だ、これぐらゐの事に三年や五年の頭腦を間斷なく費つても脳味噌の減る氣遣はない、安心しろ」

「だつて良人、濱町に居る時分、去年の冬、お風を召して三日ばかり熱の故か、ろくろく御飯も進まなかつた事が御坐いましたらう、あの時、妾は大變お父様に叱られましたよ、大體、和女が悪い、油斷して氣を付けないからだつて」

「いや、あの時に限らず感冒の原因は平生も全く和女が悪いんだ、正に和女の罪だ」

「何故で御坐います、何故お風邪は妾の罪で御坐いますの」

「何故つて、事實さうぢやアないか、をりく夜中に何を怒つて腹が立つのか、よく寢て居る乃公を無慈悲に夜具の外へ突き出す覺えがあるたらう、全體、何のために怒るんだい、はッはッはッはッ」